

平成 30 年度 RISTEX 委託調査

「人と情報のエコシステム」研究開発領域 中間評価のための調査分析

(「平成 30 年度に実施する研究開発領域の評価に向けた情報収集・分析業務」報告書)

2018 年 7 月



目次

1. 調査分析の概要.....	3
1.1. 調査の内容及び方法.....	3
1.1.1. 領域アドバイザーを対象としたアンケート調査.....	3
1.1.2. プロジェクト実施者を対象としたアンケート調査.....	3
1.1.3. 評価項目と調査項目の関係.....	3
1.2. アンケート結果の分析.....	5
1.3. 調査分析の体制.....	5
2. 中間評価項目別の分析.....	7
2.1. 対象とする問題及びその解決に至る筋道（ストーリー）.....	7
2.1.1. 対象とする問題と目指す社会の姿.....	7
2.1.2. 成果の社会への影響.....	8
2.2. 領域の運営・活動状況（プロセス）.....	11
2.2.1. 問題所有者・問題解決者への働きかけ.....	11
2.2.2. 募集・選考過程等における提案の育成.....	13
2.2.3. 運営や活動状況についてのモニタリング.....	18
2.3. 目標達成に向けた進捗状況等.....	27
2.3.1. 全体としての成果創出の見込み.....	27
2.3.2. 成果の担い手・受け手とのネットワーク形成の見込み.....	28
2.3.3. 目標達成に向けた課題と対応.....	30
2.3.4. アドバイザー自身及び周りの変化.....	32
2.3.5. RISTEX 固有の効果.....	33
2.4. RISTEX への提案等.....	33
2.4.1. 研究開発期間や予算.....	33
2.4.2. RISTEX や領域への意見・要望.....	34
付録：評価項目と調査項目との対応表（詳細）.....	37

1. 調査分析の概要

1.1. 調査の内容及び方法

「人と情報のエコシステム (HITE)」研究開発領域の中間評価のために、領域アドバイザー (AD) 及びプロジェクト (PJ) の実施者を対象に 2 種類のアンケート調査を実施した。いずれも WEB アンケート形式である。具体的には次のようなものである。

1.1.1. 領域アドバイザーを対象としたアンケート調査

プログラムを取り巻く社会情勢の変化や、プログラムとしての成果、取り組み状況を把握するために、領域アドバイザー (AD) に対してアンケート調査を実施した。調査期間は 2018 年 5 月下旬から 6 月初旬にかけての約 2 週間である。

アンケートは AD11 人に対して電子メールにて依頼を行い、11 人からの回答を得た (回収率 100.0%)。

1.1.2. プロジェクト実施者を対象としたアンケート調査

プロジェクトレベルでの成果の進展や領域マネジメントの効果等について把握するために、プロジェクト (PJ) の実施者に対してアンケート調査を実施した。調査期間は 2018 年 5 月下旬から 6 月初旬にかけての約 2 週間である。

調査対象は、各 PJ の代表者に加え、過去 2 回の領域合宿への参加者や領域メーリングリストへの登録者を中心に領域マネジメントグループ担当者が選定した。57 人の対象者に対し、回答者数は 49 人 (回収率 86.0%) であった。

次表は、採択年度及び PJ における立場別に、対象者数、回答者数、回収率をまとめたものである。

表 1 アンケートの回収率 (採択年度及び PJ の立場別)

採択年度	立場	対象者数	回答者数	回収率
28 年度	代表者	5	5	100%
	グループリーダー	8	8	100%
	その他の実施者	22	15	68.2%
	小計	35	28	80.0%
29 年度	代表者	6	6	100%
	グループリーダー	8	8	100%
	その他の実施者	8	7	87.5%
	小計	22	21	95.5%
計		57	49	86.0%

1.1.3. 評価項目と調査項目の関係

中間評価の評価項目と調査項目の対応関係を示すと、次の通りである。なお、詳細な質問項目との対応は巻末に添付する。

表 2 評価項目と調査項目の関係

評価項目(中間評価)	調査項目	
	アドバイザー向けアンケート調査	プロジェクト実施者向けアンケート調査
1. 対象とする問題及びその解決に至る筋道(ストーリー)		
1-1. 対象とする問題と目指す社会の姿 ・対象とする問題の状況や要因が具体的に分析されているか。 ・問題状況の全体像の中で、領域の政策的・社会的位置づけ(国や自治体の政策・施策や、民間を含めた類似の取り組みとの関連性、違い等)が明確にされているか。 ・問題の状況分析に基づき、意図する社会変化が具体的に提示されているか。 ・領域の実施期間中に問題状況の変化があった場合、それを踏まえた分析や目指す社会の姿の再検討がなされているか。	質問 1-1 外部環境の変化有無と対応状況 質問 1-2 外部環境の変化と対応の内容	質問 2-1 外部環境の変化有無 質問 2-2 外部環境の変化の内容
1-2. 問題解決に向けての具体的な目標と達成方法 ・領域終了時点(あるいは終了から 2、3 年以内の短期間)に実現したい具体的で妥当な目標が設定されているか。 ・目標達成に向けて妥当な方法がとられているか。 ・RISTEX の運営方針と整合しているか。		
1-3. 成果の社会への影響 ・領域成果が中・長期的に社会へ影響を及ぼし目指す社会に至るまでの構想は妥当か。 ・適切な成果の担い手・受け手が想定されているか。 ・中・長期的に社会へ影響を及ぼすための方策が検討されているか。	質問 5-3 アプローチすべき対象	質問 4-1 成果の担い手・受益者
2. 領域の運営・活動状況(プロセス) ・目標達成に向けて妥当な活動計画が立てられているか。 ・活動中に課題点や困難を把握できているか。それらを乗り越える方策が検討されているか。 ・妥当なプロジェクト・ポートフォリオが考えられ、募集選考やプロジェクト・マネジメントに反映されているか。 ・領域内外のステークホルダーを巻き込む取り組みや働きかけが適切になされているか(アドバイザー、各プロジェクト、領域成果の担い手・受け手)。 ・プロジェクト実施者をはじめ、ステークホルダーからの情報を基に、領域運営や活動状況について妥当な分析がなされているか。	質問 2-1 潜在的な提案者へのアプローチの十分性 質問 2-2 潜在的提案者にアプローチするための効果的な取組 質問 2-3 募集・選考過程における提案を育む取組の十分性 質問 2-4 提案を育む効果的な取組 質問 2-5 募集・選考段階での領域活動の具体的影響 質問 3-1 採択後のPJとのコミュニケーションの十分性 質問 3-2 採択後のPJとの効果的なコミュニケーション手段 質問 3-3. ハンズオンマネジメント等による具体的影響 質問 4-1 マネジメント内のコミュニケーションの十分性 質問 4-2 マネジメント内での効果的なコミュニケーション手段 質問 4-3 マネジメント内コミュニケーションによる具体的影響 質問 7-1 AD が重視すべき視点 質問 7-2 AD 制度の改善点	質問 3-1 提案・計画の作成や改善等に対する領域活動の影響の有無 質問 3-2 提案・計画の作成や改善等に影響を与えた領域活動の内容 質問 3-5 PJ に対する領域活動の具体的影響 質問 3-3 PJ 実施に対する領域活動の影響の有無 質問 3-4 PJ 実施に影響を与えた領域活動の内容 質問 3-5 PJ に対する領域活動の具体的影響(再掲)

<p>3. 目標達成に向けた進捗状況等(アウトカム)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・領域のアウトプット及びアウトカムの創出状況、見込みはどうか。それらについて、妥当な分析がなされているか。 ・領域のアウトカム創出に貢献しうるプロジェクトが推進されているか。 ・領域目標に即して適切なプロジェクト評価がなされているか。 ・今後取り組むべき課題が具体的に提示されているか。 ・目標達成に向けて、どのような改善が可能か。改善提案に至った理由は何か。 	<p>質問 5-1 成果創出と目標達成の見込み 質問 5-2 成果の担い手・受け手とのネットワーク形成の見込</p> <p>質問 5-4 目標達成に向けた課題と対応</p> <p>質問 6-1 自身や周りの変化 質問 6-2 RISTEX 固有の効果</p>	<p>質問 4-2 成果の担い手・受益者への働きかけの程度 質問 4-3 成果の担い手・受益者への働きかけ内容 質問 4-4 成果の担い手・受益者への働きかけをしていない理由 質問 4-5 共進化プラットフォームへの意見</p>
<p>4. RISTEX への提案等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・領域設計や設定当初の運営について改善すべき点は何か。 ・RISTEX として新たにに取り組むべき課題は何か。 ・領域・プログラムを推進する上で期待されるセンターの機能等は何か。 	<p>質問 8 研究開発期間や予算 質問 9 RISTEX や領域への意見・要望</p>	<p>質問 5 RIXTEX や領域への意見・要望</p>

1.2. アンケート結果の分析

上記のアンケート結果を踏まえ、クロス集計分析等を行った。その際、自由記述欄における回答と照合するなど、可能な解釈についてとりまとめた。

1.3. 調査分析の体制

本調査分析の実施体制は以下の通りである。

田原 敬一郎	公益財団法人未来工学研究所	政策調査分析センター	主任研究員
菊地 浩平	公益財団法人未来工学研究所	政策調査分析センター	特別研究員

2. 中間評価項目別の分析

以下では、中間評価の項目別に、調査分析結果を示す。

2.1. 対象とする問題及びその解決に至る筋道（ストーリー）

本項目は、「1-1. 対象とする問題と目指す社会の姿」、「1-2. 問題解決に向けての具体的な目標と達成方法」、「1-3. 成果の社会への影響」から構成される。

AD 向け及び PJ 向けアンケートにおいては、「1-1. 対象とする問題と目指す社会の姿」、「1-3. 成果の社会への影響」に関連する質問項目を設けた。より詳細に状況把握を行うためには、政策文書等のレビューや、有識者、問題当事者等へのヒアリング等を行う必要がある。

以下、項目別に関連する調査分析の結果を示す。

2.1.1. 対象とする問題と目指す社会の姿

AD に対し、「領域がはじまった 3 年前（平成 28 年春頃）と比較し、領域をとりまく問題状況や社会情勢は変化しているか」についてたずねた。

回答者 5 人が「変化はあったが、適切に対応できている」を、2 人が「変化はあったが、十分に対応できていない」、4 人が「対応が必要なほど大きな変化はなかった」を選択している。

【AD 向け】

質問 1-1 外部環境の変化有無と対応状況

領域がはじまった 3 年前（平成 28 年度）と比較し、領域をとりまく問題状況や社会情勢は変化していると思いますか。また、変化に対し、領域として適切に対応できていると思いますか。該当するものを 1 つお選びください。

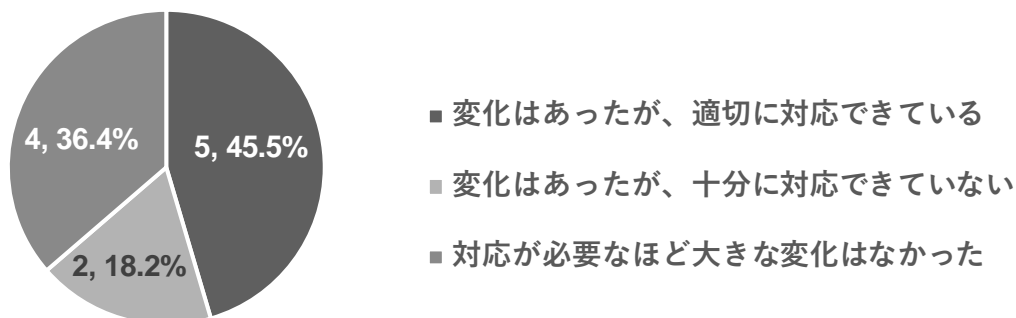


図 1 領域をとりまく問題状況や社会情勢の変化 (AD)

自由記述欄をみると、領域をとりまく問題状況や社会情勢の変化としては、AI についての関心の高まりや AI の社会実装が現実化しつつあることが指摘されている。また大きな変化はなかったとの回答の中にも自由記述欄で AI の社会実装が進みつつあるという大きな方向性は変わっていないことを指摘している AD がおり、全体として AI が社会的理解・関心を得て実際の生活の中に取り込まれ始めているという認識は共通しているものと考えられる。他方、AI への期待の高まりが過剰であること、技術の円滑な社会受容に関する危惧、領域の研究進展が技術進展に追いついていないのではないかと、といった懸念も表

明されている。

また PJ 実施者に対しても同様に、「プロジェクトがはじまった当初と比較し、領域をとりまく問題状況や社会情勢は変化していると思うか」についてたずねた。

回答者 49 人のうち「大きな変化があった」と回答したのは 20 人(40.8%)、「大きな変化はなかった」または「判断できない」と回答したのは 29 人(59.2%)であった。自由記述による具体的な状況の変化については、AI への関心の高まりと社会実装の現実化にともなうリスクの理解と共有に関する回答が多く見られた。

【PJ 実施者向け】

質問 2-1 領域を取り巻く環境や社会情勢の変化有無

プロジェクトが開始した当初と比較し、領域をとりまく問題状況や社会情勢は変化していると思いますか。該当するものを1つお選びください。

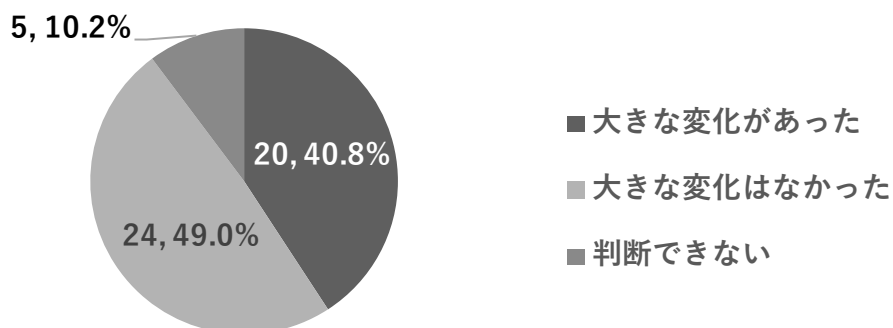


図 2 領域をとりまく問題状況や社会情勢の変化 (PJ 実施者)

2.1.2. 成果の社会への影響

AD に対し、成果の担い手・受け手とのネットワークが形成されてきているかどうかについて尋ねたところ、8 人が「形成されてきている」または「それなりに形成されてきている」と回答している。

【AD 向け】

質問 5-2 成果の担い手・受け手とのネットワーク形成の見込み

領域のコンセプトや成果を社会に普及・展開するために必要なネットワークは、形成されてきていると思いますか。

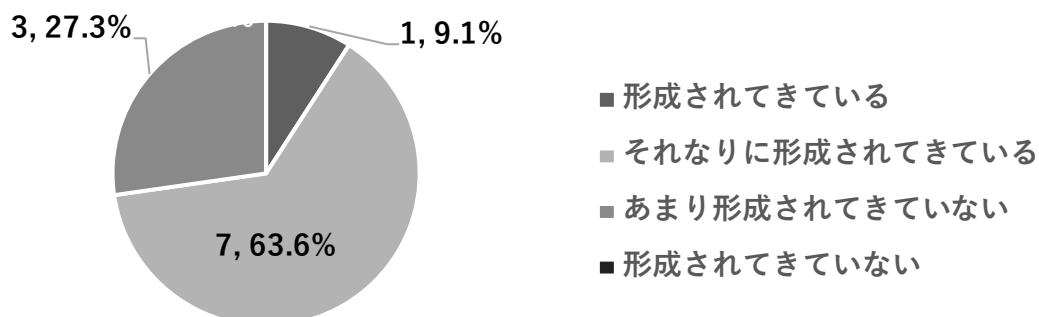


図 3 成果の担い手・受け手とのネットワーク形成の見込み

さらに、AD に対して、領域としてアプローチすべき対象にはどのような組織や個人がいるかをたずねた。

【AD 向け】

質問 5-3 アプローチすべき対象

今後、成果の担い手・受け手として領域がアプローチすべき対象にはどのような人や組織がいますか。特に領域として対話や連携などを模索すべき方々がいれば、その理由や方法とともに具体的にご記入ください。特になければ「特になし」とご記入ください。

AD からの回答は下記の通りである。

- マスコミ（出版、放送、新聞、Web 等）
- 企業関係者（経営者、開発者、ビジネスモデルの立案者など）
- 政策担当者
- 自治体関係者
- 次代の情報社会を担う若手（情報系大学院生、ベンチャー志望者など）
- 初等・中等教育機関の教員
- （消費者、サービスの需要側としての）一般市民
- （デザイン思考、情報システム系の）研究者

単純な担い手・受け手というよりは、AI の社会実装や利活用場面の具体化・現実化をさらに進めて行く際の協働者としての側面が強調されている。特に小中高の教育課程において情報機器を適切に導入することの重要性や、問題領域の潜在的成員としての大学院生やベンチャー志望者に対するアプローチの重要性を指摘するものがあった。また技術と人との「なじみ」を考えることが対話・連携の核になるとの指摘が見られた。一方で、対象となる個人や団体が未だ不明確であるためにアプローチが難しいことや、技術の提供側と需要側の巻き込みが不十分であることが課題であるとの指摘も見られた。

こういった回答は、AI の社会実装・利活用の具体化・現実化という環境・社会情勢の変化があったことを指摘する 2.1.1 の結果と整合していると考えられる。

また、PJ 実施者を対象とした質問では、PJ として想定する成果の担い手・受益者を尋ねた。

【PJ 実施者向け】

質問 4-1 成果の担い手・受益者

プロジェクトの成果の普及・展開に向けて、働きかけや情報発信を行うべき成果の担い手（成果を普及展開する人・組織）や、受益者（政府・自治体、各種団体等の利害関係者、市民等）として、どのような人々を想定していますか。具体的にご記入ください。

49人中46人から得られた回答（「特になし」を除く）をみると、「市民」、「行政」、「メディア」、「事業者」、「専門家」といった幅広いセクターがまんべんなく挙げられており、中にはPJごとに固有の成果の担い手・受益者を挙げている回答者もいるが、全体的に具体性に乏しい。「現時点では明確ではない」「具体的には検討中」という留保付きの意見も散見された。なお、表3は、セクター別に主な意見をまとめたものである。

表3 PJ実施者の考える成果の担い手・受益者¹

セクター	(凡例)	アンケートで挙げられている対象
市民	一般市民、当事者、NPO/NGO等	地域コミュニティ 直接的対象として「意識の高い(concerned)」市民。間接的対象として公衆(空間的にも、次世代にも) (受益者として)日本国民、次いで他国民
行政	国、自治体(都道府県、市町村)、国際機関等	政府・自治体の政策担当者 規制当局、資金配分機関 (担い手として)立法・行政
メディア		科学ジャーナリスト クリエイター デザイナー、編集者 Google社など、情報発信媒体
事業者	生産者、製造業者、流通業者、電機・ガス会社、金融・保険業者、広告業者、交通機関、小売店、飲食店、業界団体等	導出候補企業 企業経営者、国内外の企業人
専門家	組織(学協会、研究・教育機関(研究所/大学/小中高校等)、医療機関)、チーム(審議会、研究グループ等)、個人等	学生 中等教育関係者 学術・技術者団体など (受益者として)情報技術者 AIやロボティクス研究者 研究協力者・対象となっている科学者や技術者 (担い手として)分子ロボット研究者・学生および倫理研究者・学生 (成果の展開の担い手として)PJの母体である研究者グループ AIR 法学者、弁護士 人文学者 テクノロジー・アセスメント(TA)関係者(国会図書館調査及び立法考査局など) 医療法人グループ・医療看護介護関連団体・医療専門職
その他		発信者を考え中 成果を発信したい人が、すべての人に向けて発信する 単なる従来からの政府が主催する委員会の構成員のような利害関係者ではなく、具体的にどのような関与者が受益者となるのかも含めて検討を継続中 現時点では明確ではないが、分子ロボットの正しい実用化により社会全体が受益者となれば良い 知的な機械・システムに関心を有する担い手・受益者 成果の担い手としては、まずそれぞれの学界内での学術的方法による情報発信を想定。その意味では、学問的共同体が受益者。さらに、本研究は立法提案と密接に結びつく内容であることから、政府や自治体も受益者として想定。この関係での成果発信はどのような形で行うべきか、現在模索中。同時に、人工知能開発に関わる技術サイドに対して、将来的にどのようなロボットを作っていけばリーガルリスクを回避することができるのかを提示するという意味で受益者。 市民と自治体に関して、コミュニティと個人を含めた人々のQOLの向上に寄与 一般市民をはじめ、行政や企業の方々 全てのステークホルダー、市民、行政、産業、政策立案者、など。

¹ セクター区分及び凡例は、科学技術振興機構科学コミュニケーションセンター「科学コミュニケーション案内」(2015年)による。

		<p>(担い手として)JST、政府、各種教育機関、メディア (受益者として)とりわけ技術開発に関わる利害関係者、市民等 成果の担い手・受益者としては、科学者コミュニティ、政府・自治体、資金配分機関、国会、市民など多様な主体を含む。 成果の担い手としては研究者および研究に基づく専門職集団および行政。受益者としては市民および市民に対してサービスを提供するところの専門職集団 研究者や一般の方々(ビジネスマン、文学者、エンジニア等)とバランスよく交流する 第 1 に人工知能に関する法制度の適切な整備により、人工知能を開発及び利用する事業者が過度な萎縮から免れることができると考えている。第 2 に、政府に対して適切な法制度設計のあり方を示すことは、今後の産業育成において重要な意味を持っていると考えている。第 3 に市民は適切な法制度設計により、人工知能から便益を受けるだけでなく、人工知能による事故が責任を持ってマネジメントされた社会に住むことが出来る。 第一ターゲットは一般企業の研究開発セクションの責任者、および構成員研究者。特に日本を代表するような製造業大企業。第二ターゲットは理研、産総研など国の研究所に所属する研究者。第三ターゲットは国の行政官。 学術団体や政府自治体など、政策決定に関わる側の手助け、コミュニケーション促進を第一に想定 予算省庁、大学等の研究機関の専門家に対する情報発信も重要 投資活動を対象として、技術と社会を橋渡しする研究プラットフォームとする 啓蒙された市民。一般市民に対して、具体的に利用できるガイドラインを提供できる情報関連企業への普及展開を想定 分子ロボティクスの情報発信、啓蒙対象としては最終的には一般市民を考える必要</p>
--	--	---

2.2. 領域の運営・活動状況（プロセス）

本評価項目では、「①目標達成に向けて妥当な活動計画が立てられているか」や「②活動中に課題点や困難を把握できているか、それら乗り越える方策が検討されているか」、「③妥当なプロジェクトポートフォリオが考えられ、募集選考やプロジェクト・マネジメントに反映されているか」、「④領域内外のステークホルダーを巻き込む取り組みや働きかけが適切にされているか」、「⑤プロジェクト実施者をはじめ、ステークホルダーからの情報をもとに、領域運営や活動について妥当な分析がなされているか」について検証することになる。

ここでは、「潜在的な提案者への働きかけ」、「募集・選考過程（採択直後を含む）における提案の育成」、「運営や活動状況についてのモニタリング」という 3 点から結果のとりまとめを行った。

2.2.1. 問題所有者・問題解決者への働きかけ

2.2.1.1. プロジェクト及び潜在的な提案者に対する働きかけ

まず、PJ の潜在的な提案者に十分にアプローチできたかを AD に対してたずねた。11 人中 10 人が「アプローチできている」または「それなりにアプローチできている」と回答、1 人は「あまりアプローチできていない」と回答している。

【AD 向け】

質問 2-1 潜在的な提案者へのアプローチの十分性

領域の成果創出に貢献しうる潜在的な提案者に対し、領域として十分にアプローチできていると思いますか。該当するものを1つお選びください。

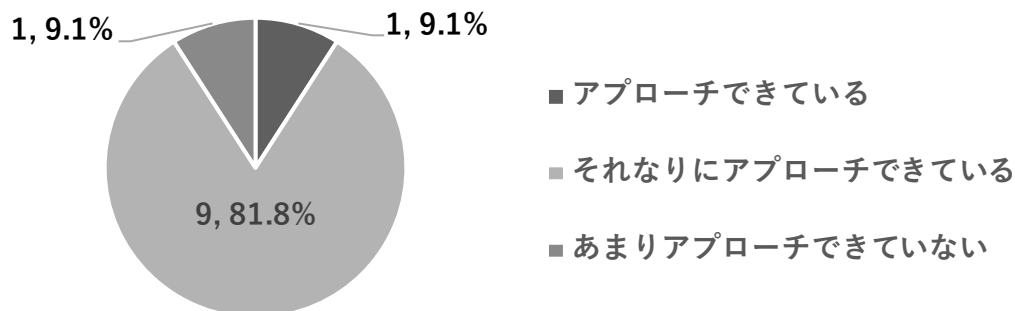


図 4 潜在的な提案者に対するアプローチの十分性

また最大3つまでを選択する形式で効果的と思われる取組について尋ねたところ、「領域主催のシンポジウム等のイベント」8件を最多として、「提案者への個別アプローチ」「JST外での提案募集周知」の5件、「募集説明会の実施・募集要項の配布」「総括・ADのネットワークを通じた提案募集周知」の3件の順となった。その他として課題が挙げられており、「アプローチ先が大学に偏っており民間企業への訴求をする必要がある」ことが指摘されていた。

【AD 向け】

質問 2-2 潜在的な提案者へのアプローチするための効果的な取組

領域の成果創出に貢献しうる潜在的な提案者へのアプローチするために、効果的であると思う領域の取組を次の中から3つ以内でお選びください。

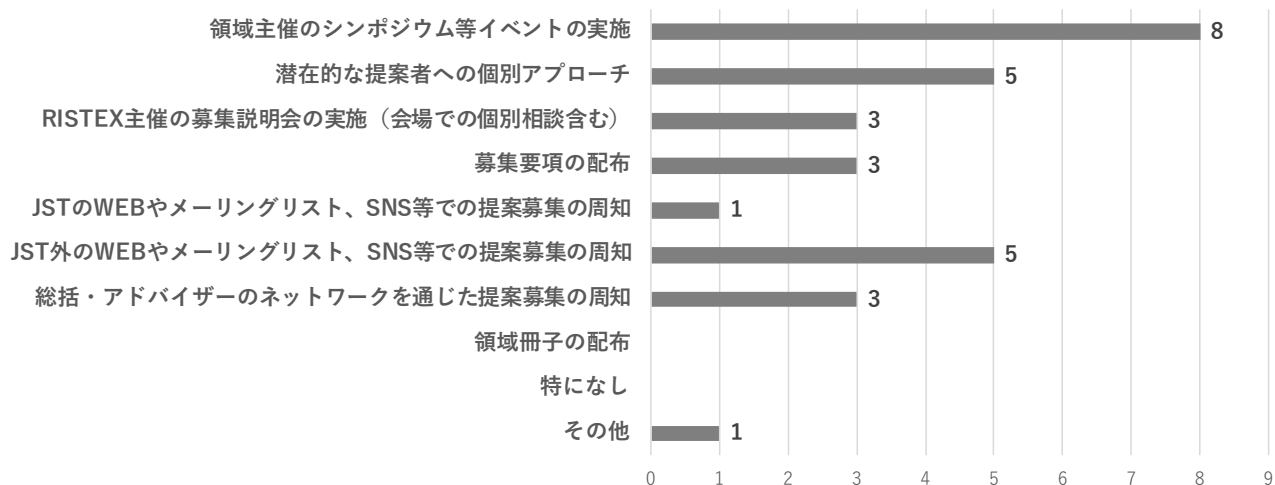


図 5 潜在的な提案者へのアプローチするための効果的な取組

2.2.2. 募集・選考過程等における提案の育成

2.2.2.1. 募集・選考過程等における提案を育む取組の十分性

募集・選考過程および採択直後の段階で、領域として提案を育む取組が十分にできていたかどうかについてADに尋ねたところ、全員が「できている」「それなりにできている」のいずれかを選択していた。なお、以下でいう提案を「育む」とは、提案された内容と領域の問題意識およびコンセプトとの親和性の向上や方向性の調整、社会問題の解決に向けた協働や社会実装を重視した研究開発計画の具体化、改善等に取り組むことを指す。

【AD向け】

質問 2-3 募集・選考過程等における提案を育む取組の十分性

募集・選考過程や採択決定直後の段階において、領域として、提案を「育む」取組は十分にできていると思いますか。該当するものを1つお選びください。

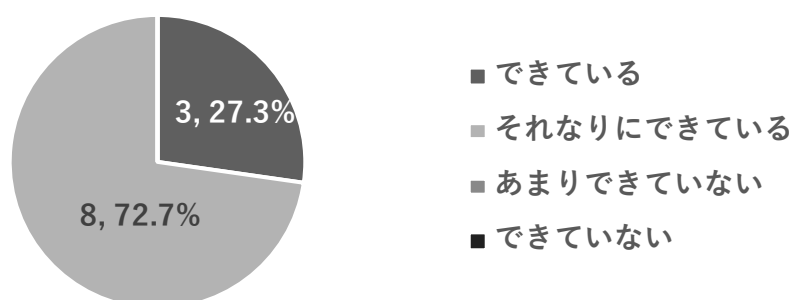


図 6 提案を育む取組の十分性

一方、PJ実施者に対しては「質問 3-1 提案・計画の作成や改善等に対する領域活動の影響の有無」で、領域からのアプローチがPJに影響を与えたかについて尋ねた。

「影響を受けた」または「それなりに影響を受けた」と回答したPJ実施者は合わせて38人(77.5%)となっている。ADによる自己評価とも整合する結果であり、領域が主催・企画した活動が提案・計画の作成・改善に一定の影響を与えていたことがうかがえる。採択年度別にみると、若干ではあるが、平成29年度採択課題のほうが「影響を受けた(それなりに影響を受けた)」と回答する割合が多い(図7)。PJにおける立場別にみると、「その他の実施者」よりも「研究代表者」や「プロジェクトリーダー」において影響を受けたとする回答が多い(図8)。

【PJ実施者向け】

質問 3-1 提案・計画の作成や改善等に対する領域活動の影響の有無

募集・選考段階および採択決定直後において、提案を着想し、計画を作成し、内容を改善していくにあたり、領域側の活動等から何らかの影響を受けましたか。該当するものを1つお選びください。

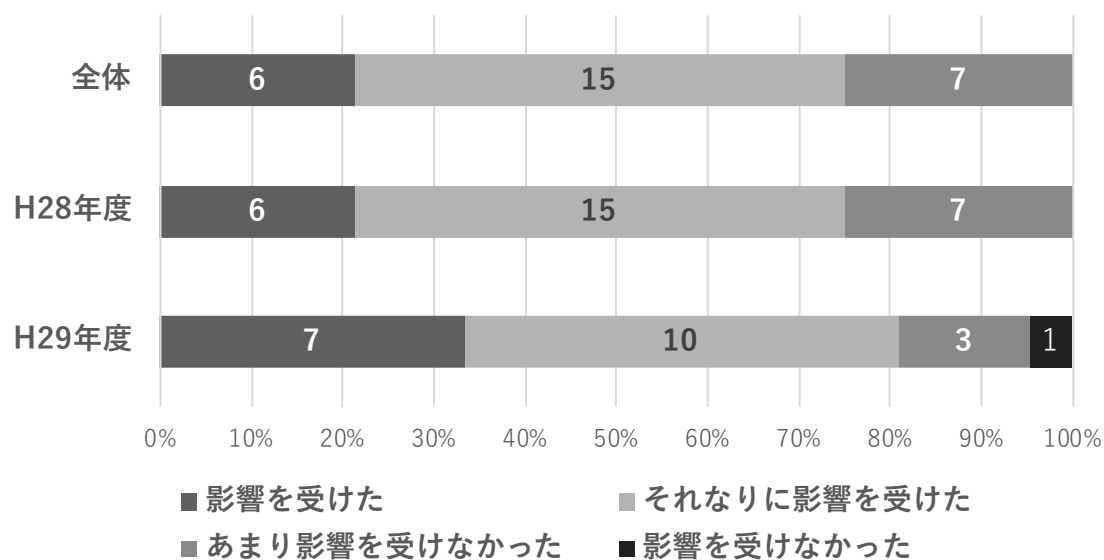


図 7 提案・計画の作成や改善等に対する領域活動の影響の有無（採択年度別）

【PJ実施者向け】

質問 3-1 提案・計画の作成や改善等に対する領域活動の影響の有無

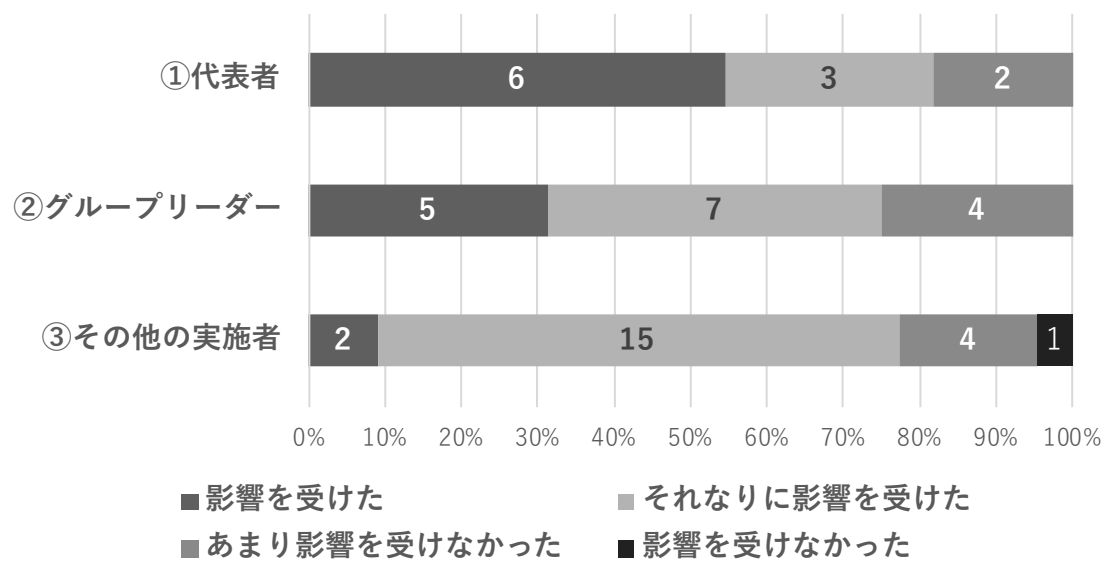


図 8 提案・計画の作成や改善等に対する領域活動の影響の有無（立場別）

2.2.2.2. 募集・選考過程等における提案を育むのに効果的な取組内容

AD に対する質問 2-4 では、提案を育むのに効果的な取組内容について尋ねた。「面接選考会でのやりとり」や「総括面談での採択条件のすり合わせや方針の確認」といった、PJ 実施者との直接的・具体的なやりとりが含まれる活動があげられていた。

【AD 向け】

質問 2-4 提案を育む効果的な取組

募集・選考過程や採択決定直後の段階において、提案を「育む」取組として、効果的であると思うものを、次の中から 3 つ以内で選んでください。

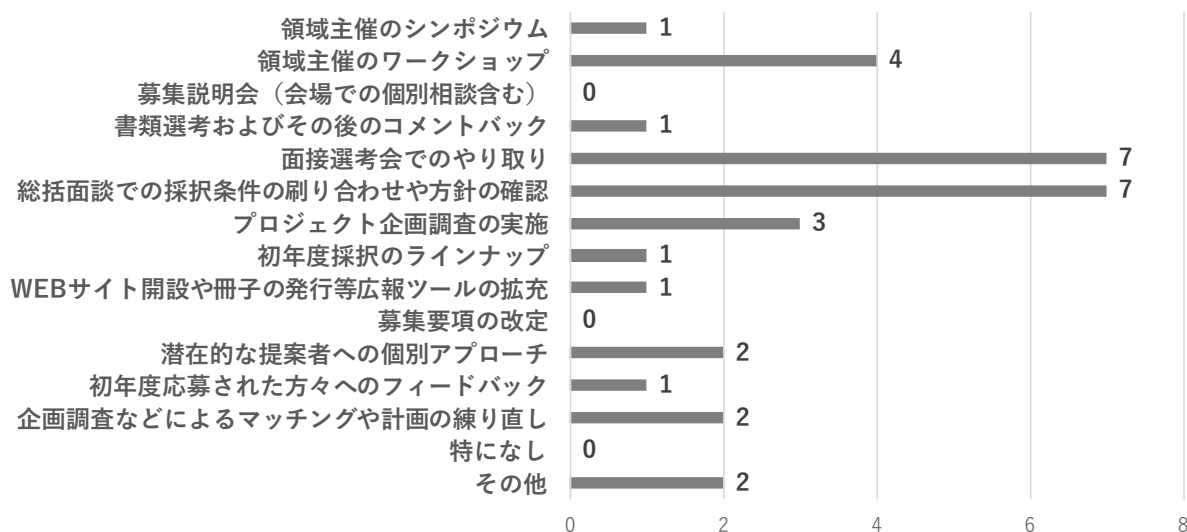


図 9 提案を育む効果的な取組

一方、PJ 実施者に対しては、質問 3-2 において、「提案・計画の作成や改善等に影響を与えた領域活動の内容」を尋ねている。その回答をみると、「領域主催のワークショップ」を選択した回答者が 17 と最も多く、次いで「公開シンポジウム等のイベント」が 12 と、提案前の段階での活動が評価されていることが分かる。特に後者については平成 28 年度採択課題の PJ 実施者により支持されており、全体として 3 番目に回答の多かった「PJ 間連携の促進のための場作り」（11 人）が平成 29 年度採択者に支持されているのと対照的である。

【PJ 実施者向け】

質問 3-2 提案・計画の作成や改善等に影響を与えた領域活動の内容

募集・選考段階および採択決定直後において、影響の大きかった領域側の活動を次の中から3つ以内で選んでください。

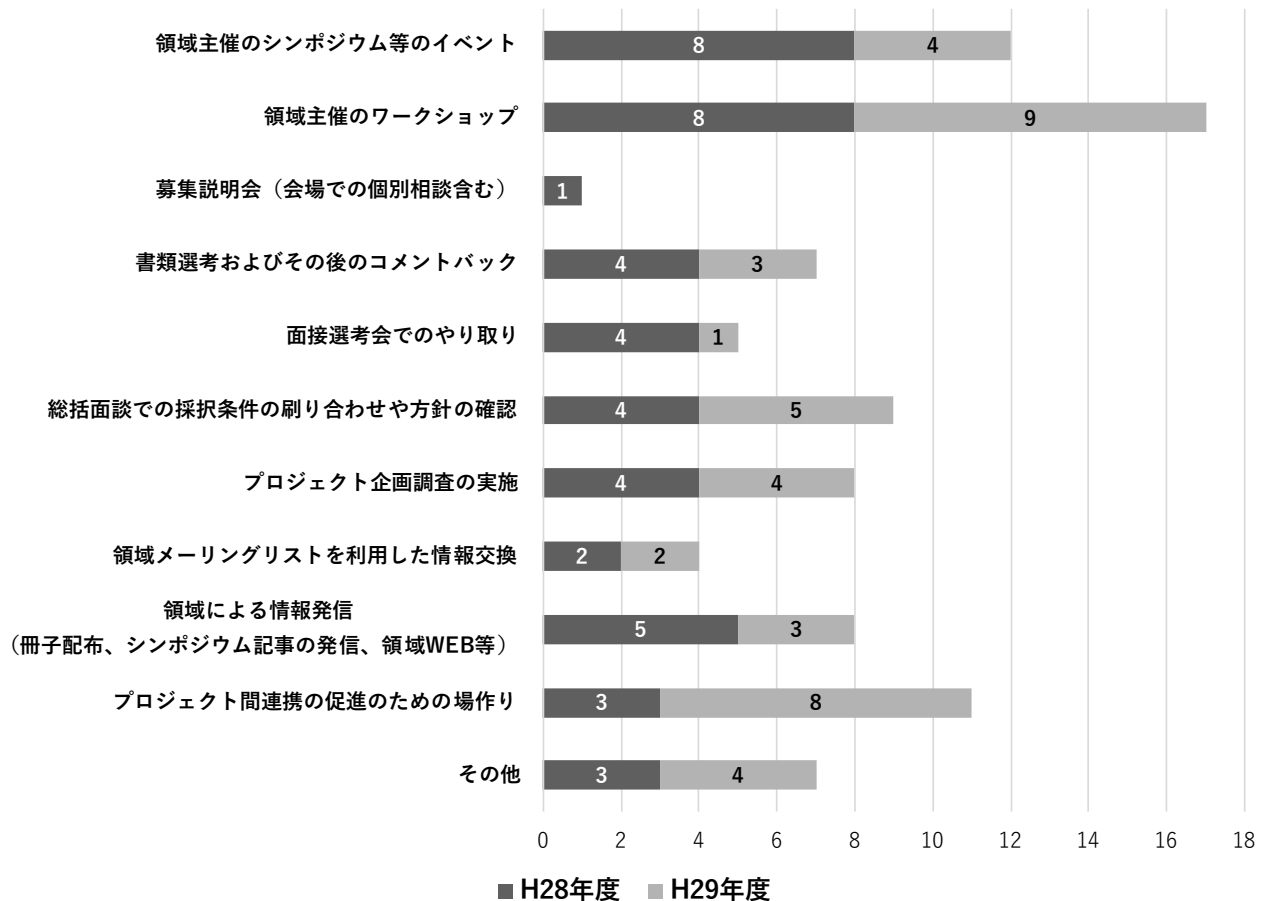


図 10 提案・計画の作成や改善等に影響を与えた領域活動（採択年度別）

研究代表者、グループリーダー及びその他の実施者といった PJ における立場別にみると、研究代表者においては、「総括面談での採択条件の刷り合わせや方針の確認」、「PJ 間連携の促進のための場作り」、「その他」がそれぞれ 4 人と最も多い。「その他」の内容についてみると、「領域総括や領域マネジメントグループ、領域 AD からの助言」といったもののほか、「PJ 主催のキックオフシンポジウムや国際シンポジウムでの議論・情報交換」といったものが挙げられていた。グループリーダーにおいては、「領域主催のワークショップ」が 7 人と最も多く、次いで「PJ 企画調査の実施」及び「PJ 間連携の促進のための場作り」がそれぞれ 4 人となっている。その他については「個別のフィードバック」が挙げられている（他には「領域合宿」を挙げている回答者が 2 人いた）。その他の実施者については、「領域主催のワークショップ」の 7 人を筆頭に、「領域主催のシンポジウム等のイベント」及び「領域による情報発信（冊子配布、シンポジウム記事の配信、領域 WEB 等）」がそれぞれ 6 人となっている。

【PJ実施者向け】

質問 3-2 提案・計画の作成や改善等に影響を与えた領域活動の内容

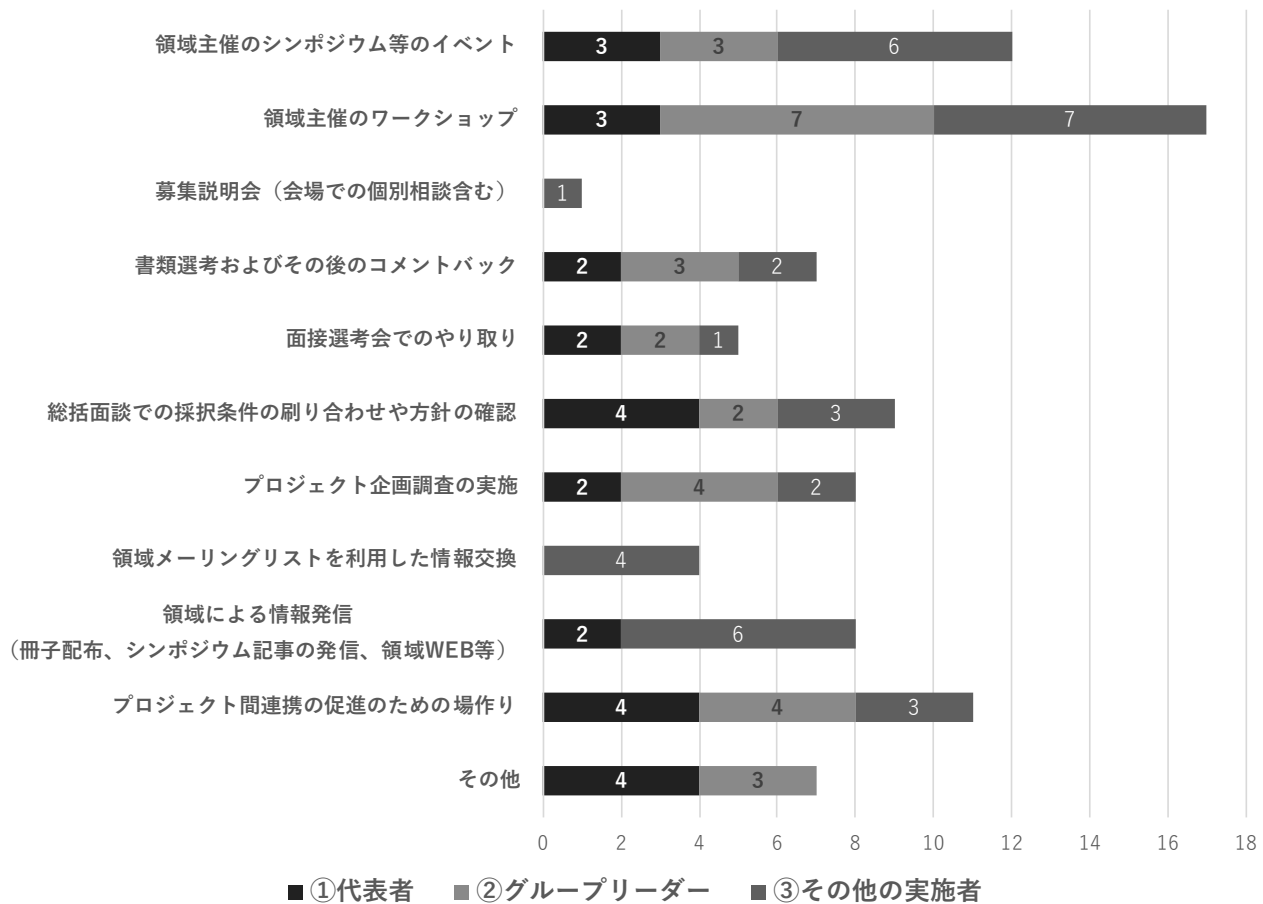


図 11 提案・計画の作成や改善等に影響を与えた領域活動（立場別）

2.2.2.3. 募集・選考過程や採択決定直後における領域活動の具体的影響や効果

募集・選考過程や採択決定直後における領域活動の具体的影響や効果については、AD 及び PJ 実施者のそれぞれについて、以下のような自由記述形式で回答を求めた。なお、PJ 実施者については PJ 実施過程における影響や効果についても尋ねており、ここでは「募集・選考過程や採択決定直後における領域活動」に明確に関わると思われるもののみを抽出した。

【AD 向け】

質問 2-5 募集・選考段階での領域活動の具体的影響

募集・選考段階や採択決定直後における領域活動によって、どのような影響や効果があったのか(良い影響だけでなく、もし悪い影響もあれば)、できるだけ具体的にご記入ください。特になければ「特になし」とご記入ください。

【PJ 実施者向け】

質問 3-5 プロジェクトに対する領域活動の具体的影響

募集・選考段階や採択決定直後もしくはプロジェクト実施過程における領域活動によって、プロジェクトの何がどう変わったのか(良い影響だけでなく、もし悪い影響もあれば)、できるだけ具体的にご記入ください。

特になければ「特になし」とご記入ください。

まず、AD が認識している具体的な効果としては、領域のテーマと PJ 個別のテーマとの齟齬や不一致の解消を面接選考会や総括面談ですり合わせる事ができたこと、合宿や HITE 領域紹介冊子誌面上での対談といった情報共有の場が提案者の領域趣旨の理解につながったことなどが挙げられていた。一方、改善点として、「PJ 実施者(提案者)側が領域の趣旨を理解したのは合宿での情報共有の場を経た後である」こと、これと関連して「合宿を採択直後に実施する方がよいのではないか」という指摘があった。また「キーワードに対する選考側の共通理解が不十分」という意見もあった。他にも、「AD としてのコメントでは本来の強みを伸ばすことを強調する必要があった」「研究対象が広く設定されていることが、「深く効果的に」という方向につながらない可能性もある」といった反省点・課題を指摘する回答も見られた。

一方、PJ 実施者側の意見をみると、その多くは PJ の実施過程に関わるものであるが、採択決定直後における領域活動からの具体的な影響として、「採択決定後に領域側からのアドバイスにより領域内でのグループ間連携が促進された」ことが挙げられている。詳細は 2.2.3.1 で触れるが、こうした連携が領域合宿などを経ることでよりスムーズになったり、自身の PJ へのフィードバックがもたらされたりしていることを挙げる意見も多くみられた。

2.2.3. 運営や活動状況についてのモニタリング

2.2.3.1. プロジェクトに対するハンズオンマネジメント

(1) 採択後のプロジェクトとのコミュニケーションの充分性

RISTEX では採択後も積極的に PJ に対し関与する「ハンズオンマネジメント」を行っているが、ここではまず、採択後に PJ とのコミュニケーションが十分にとれているかを検討した。AD による採択後の PJ への関与に関しては、「コミュニケーションがとれている」「それなりにコミュニケーションがとれている」とする回答が 8 人であったのに対し、「あまりコミュニケーションとれていない」とする回答した AD も 3 人いた。

【AD 向け】

質問 3-1 採択後のプロジェクトとのコミュニケーションの十分性

(担当プロジェクトを中心にお答えください)

RISTEX では、領域の成果創出と目標達成に向けて、採択後もプロジェクトに対して関与するハンズオンマネジメントを実施していますが、プロジェクトとのコミュニケーションは十分にとれていますか。該当するものを1つお選びください。

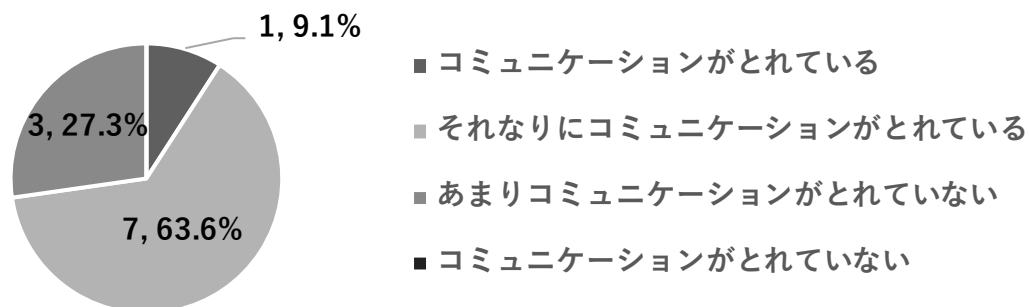


図 12 担当 PJ とのコミュニケーション

これと関連して、PJ 実施者向けアンケートでは、PJ の実施に対する領域活動の影響について尋ねている。

全体として、「影響を受けた」または「それなりに影響を受けた」と回答した PJ 実施者は合わせて 38 人 (77.5%) となっている。これは、AD による PJ とのコミュニケーションに関する自己評価とも整合する結果であるといえる。採択年度別にみると、平成 29 年度のほうが「影響を受けた」とする回答者が多い (図 13)。PJ における立場別にみると、募集・選考段階および採択決定直後と同様、「その他の実施者」よりも「研究代表者」や「プロジェクトリーダー」において影響を受けたとする回答が多い (図 14)。

【PJ実施者向け】

質問 3-3 プロジェクト実施に対する領域活動の影響の有無

これまでプロジェクトを実施していく過程で、領域側の活動等から何らかの影響を受けましたか。該当するものを1つお選びください。

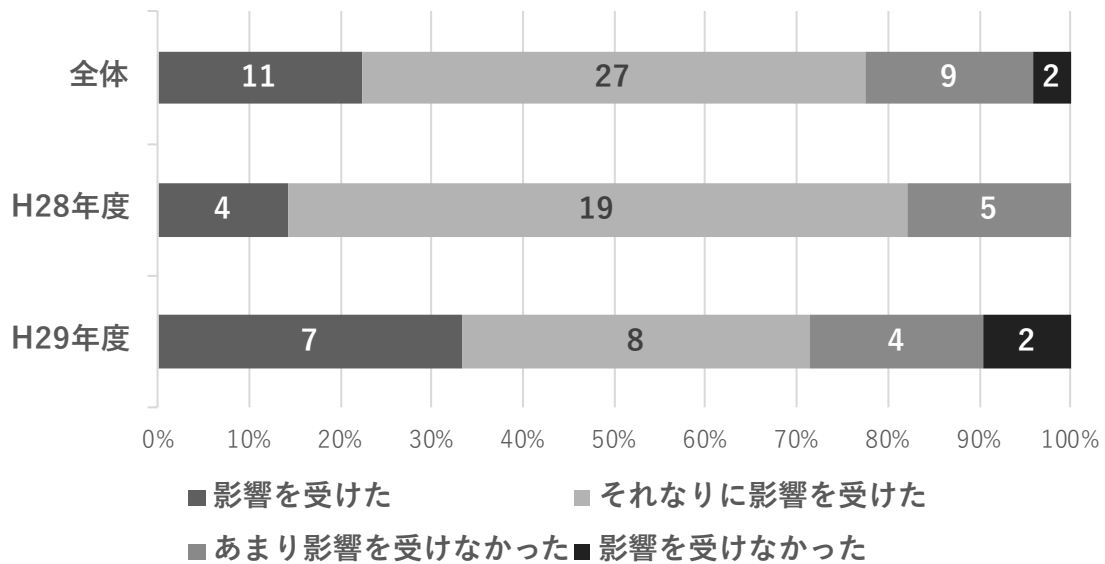


図 13 プロジェクト実施に対する領域活動の影響の有無（採択年度別）

【PJ実施者向け】

質問 3-3 プロジェクト実施に対する領域活動の影響の有無

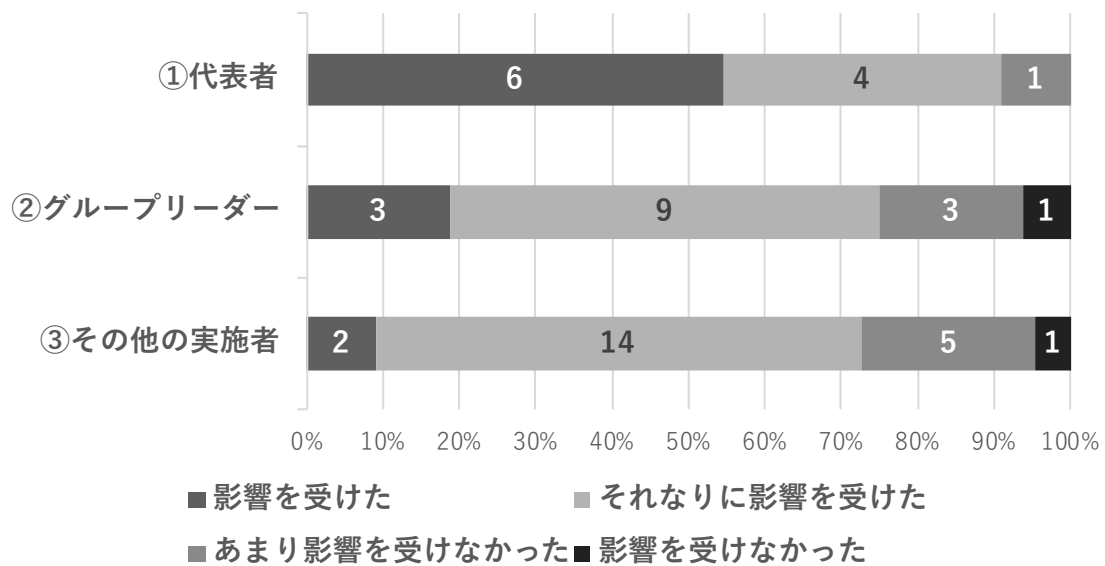


図 14 プロジェクト実施に対する領域活動の影響の有無（立場別）

(2) 採択後のプロジェクトとの効果的なコミュニケーション手段

AD に対し、採択後の PJ とのコミュニケーション手段や取組について、効果的と思うものを 3 つ以内で回答してもらった（質問 3-2）。延べ 29 回答のうち「合宿等の領域全体会議」が 9 件、「PJ ごとの進捗報告会・意見交換会」が 8 件となっている（図 15）。非日常的な場において、PJ との間で緊密かつ対面で対話できる手段が自己評価として高く認識されているといえる。

【AD 向け】

質問 3-2 採択後のプロジェクトとの効果的なコミュニケーション手段

（担当プロジェクトを中心にお答えください）

プロジェクトの実施段階において、プロジェクトを育むために効果的と思うコミュニケーション手段や取組を 3 つ以内でお選びください。

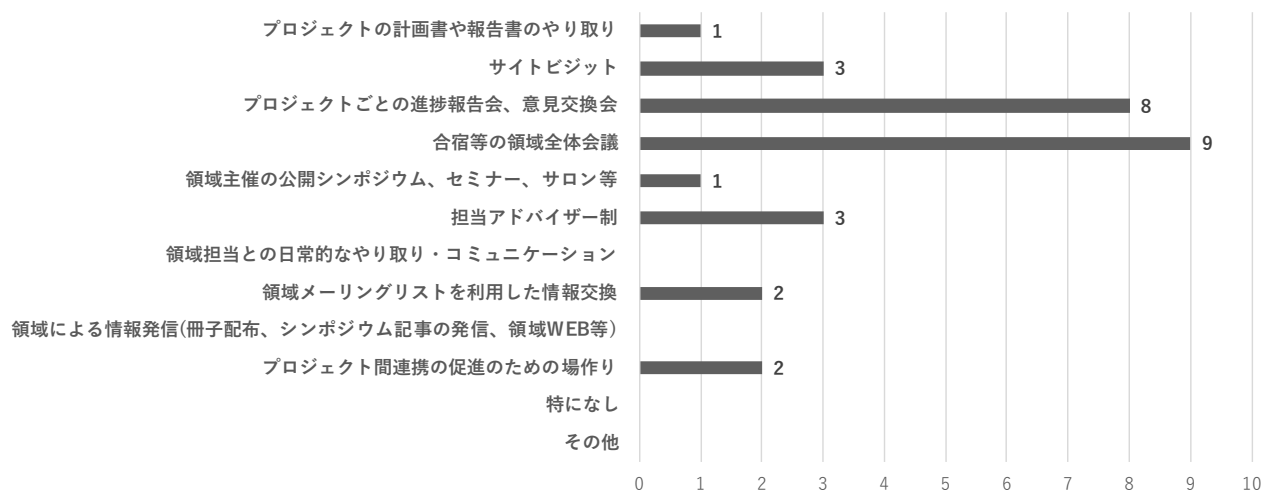


図 15 採択後のプロジェクトとの効果的なコミュニケーション手段

PJ 実施者に対し、影響を与えた活動の内容を尋ねる質問では「合宿等の領域全体会議」が延べ 83 回答中 21 件と最も多く、次いで「担当 AD との日常的なやりとり、コミュニケーション」が 12 件、「PJ ごとの進捗報告会や意見交換会」が 9 件と続いており、AD の効果的なコミュニケーション手段についての回答と傾向が一致している。なお、採択年度別にみると、平成 28 年度、29 年度ともに「合宿等の領域全体会議」が最も多いのは共通しているが、前者については「担当 AD との日常的なやりとり、コミュニケーション」が、後者については「PJ 間連携の促進のための場作り」がそれぞれ 2 番目に多い（図 16）。PJ における立場別にみると、研究代表者については回答に比較的ばらつきがあり、「PJ の計画書や報告書のやりとり」も相対的に影響が大きいことが分かる（図 17）。

【PJ 実施者向け】

質問 3-4 プロジェクト実施に影響を与えた領域活動の内容

これまでプロジェクトを実施していく過程で、影響の大きかった領域側の活動を次の中から3つ以内で選んでください。

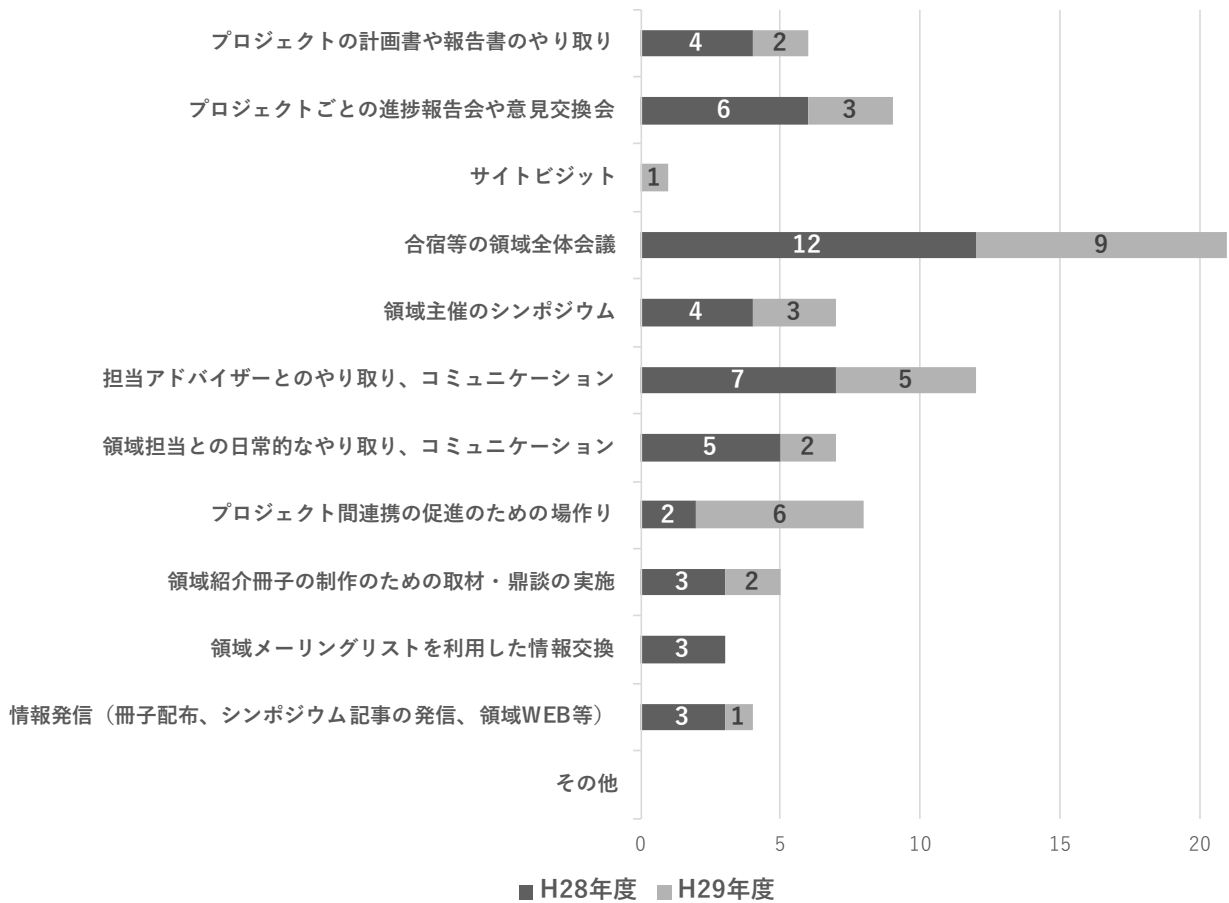


図 16 プロジェクト実施に影響を与えた領域活動の内容（採択年度別）

【PJ 実施者向け】

質問 3-4 プロジェクト実施に影響を与えた領域活動の内容

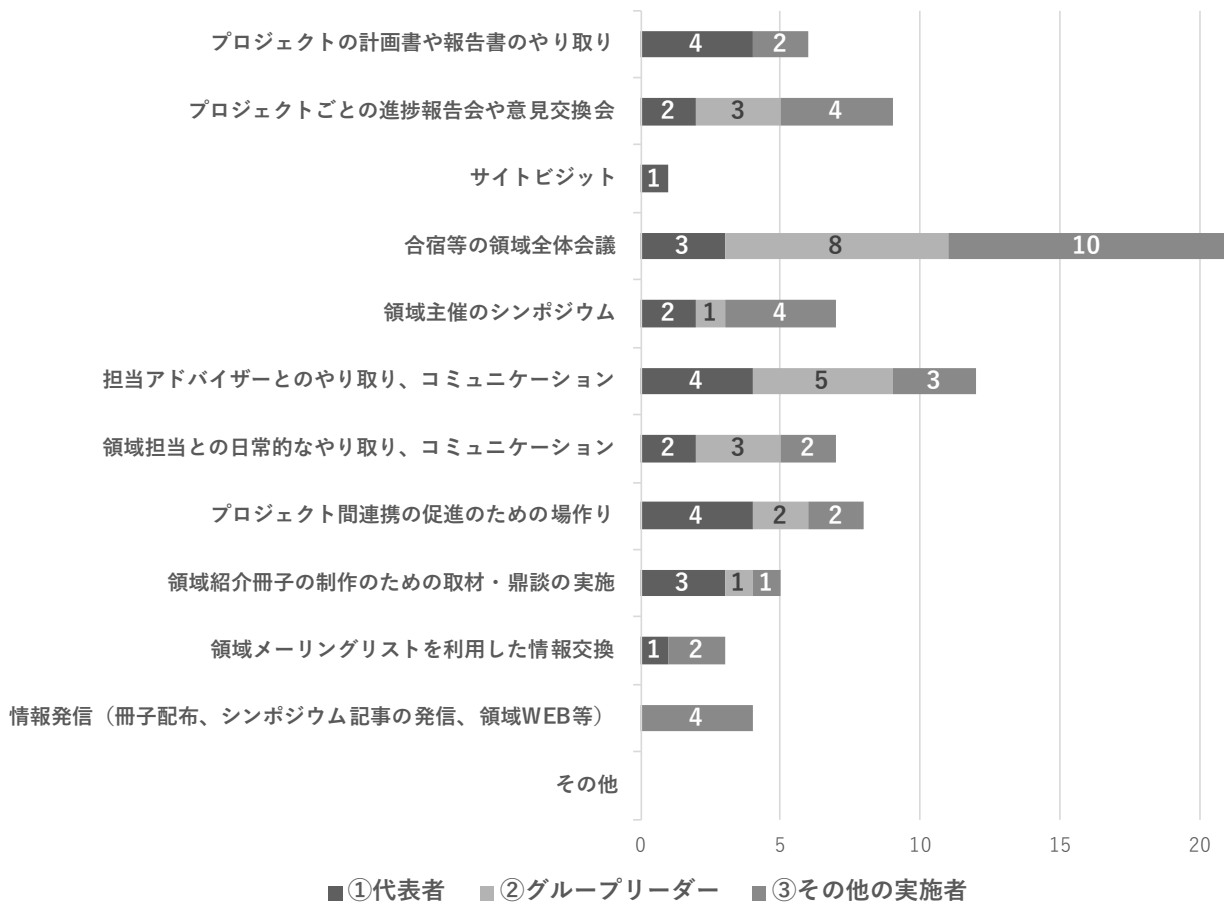


図 17 プロジェクト実施に影響を与えた領域活動の内容（立場別）

(3) ハンズオンマネジメント等による具体的影響や効果

RISTEX では採択後も積極的に PJ に対し関与する「ハンズオンマネジメント」を行っているが、AD 及び PJ 実施者に対して、こうした PJ の実施段階における領域活動の影響や効果の内容についても自由記述形式で尋ねた。なお、前述のように、PJ 実施者については募集・選考過程や採択決定直後における影響や効果についても同一の質問で尋ねており、ここでは「PJ 実施過程における領域活動」に明確に関わると思われるもののみを抽出した。

【AD 対象】

質問 3-3 ハンズオンマネジメント等による具体的影響

プロジェクトの実施段階における領域活動(プロジェクトとのコミュニケーションおよびハンズオンマネジメント)によって、どのような影響や効果があったのか(良い影響だけでなく、もし悪い影響もあれば)、できるだけ具体的に記入ください。特になければ「特になし」とご記入ください。

【PJ 実施者対象】

質問 3-5 プロジェクトに対する領域活動の具体的影響(再掲)

募集・選考段階や採択決定直後もしくはプロジェクト実施過程における領域活動によって、プロジェクトの何がどう変わったのか(良い影響だけでなく、もし悪い影響もあれば)、できるだけ具体的に記入ください。特になければ「特になし」とご記入ください。

AD 向けの質問では、「合宿等の領域全体会議」などにより「書面の研究計画ではすり合わせしきれないところまでコミュニケーションが可能となった」、「PJ の研究会やイベントに AD が参加することで一定の緊張感を持って取り組むことができる」、「PJ の活動を詳細に把握することにより、正確な評価が可能となるとともにその評価を直接代表者に伝えることができる」といった意見が述べられていた。また、必ずしも AD の専門性と PJ の内容が一致するとは限らないものの、研究成果を享受する立場から、研究者が見落としている一般社会の常識を反映する点でコミュニケーションをすることの必要性も指摘されていた。

PJ 実施者については、よい影響として、領域合宿を通じた「他の PJ の研究内容からの刺激や示唆(技術進化の方向性に対する示唆、開発者とユーザーとの対話の場の必要性の認識など)」「領域全体における PJ の位置づけの適正化」、他の PJ との連携を通じた「問題意識や解決のための方法論の深化、参加メンバーの規模や多様性の拡大」、といった点が挙げられていた。一方、こうした交流を通じて、領域に参加する研究者等ですら「新技術の法的規制に関する見通しが楽観的すぎる」ことや、「科学知識を有し、社会に対する発信の必要性を認識しており活動を開始しているものの、社会のための科学についての理解が薄い」ことを指摘する意見もあり、こうした知見や経験を共有することの重要性が浮き彫りになった。また、「それぞれにミッションを掲げて開始された PJ であるため、途中から具体的に連携活動を行うにしてもとっかかりがつかみにくい」といった意見もあった。その他、学術研究の文脈とは異なる「社会的活動の重要性」、「科学的知識の社会実装の重要性」、「具体的な情報発信の宛先や PJ のゴールの明確化」といったことに対する認識が芽生えたことを挙げる意見が散見されたが、「学術研究が評価されないということ聞き衝撃を受けた(評価しないということが理解できない)」という回答を質問 4-5 など他の設問においても繰り返す実施者もあり、必ずしも実施者すべてが腑に落ちているわけではないこともうかがえた。

2.2.3.2. 領域マネジメントグループ内でのコミュニケーション

(1) 領域マネジメントグループ内でのコミュニケーションの十分性

領域マネジメントグループ内でのコミュニケーションについては、回答者 11 人全員が「コミュニケーションがとれている」「それなりにコミュニケーションがとれている」と回答している。

【AD 向け】

質問 4-1 マネジメント内のコミュニケーションの十分性

よりよい領域の成果創出と目標達成に向けて、領域マネジメントグループ(総括・アドバイザー・RISTEX)内でのコミュニケーションは十分にとれていますか。該当するものを1つお選びください。

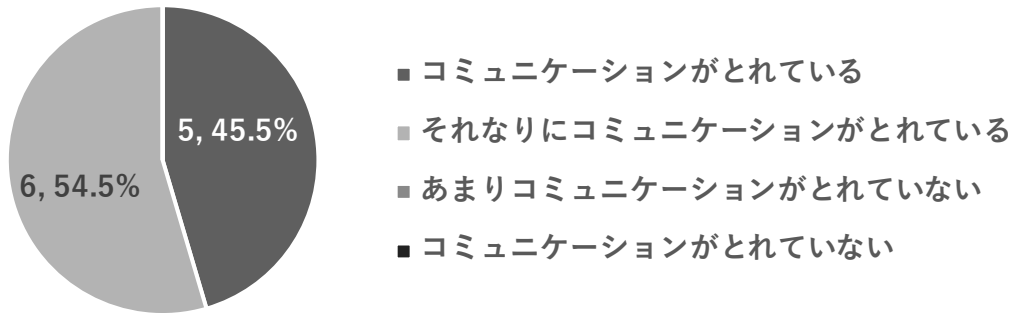


図 18 領域マネジメントグループ内のコミュニケーション

(2) 領域マネジメントグループ内での効果的なコミュニケーション手段

領域マネジメントグループ内での効果的なコミュニケーション手段としては、「領域会議」が10人と最も多く、「PJの計画書や報告書の精査・意見の共有」8人、「合宿等の領域全体会議」7人と続いている。

【AD 向け】

質問 4-2 マネジメント内での効果的なコミュニケーション手段

領域の成果創出と目標達成に向けて効果的と思う領域マネジメントグループ内でのコミュニケーション手段や取組を3つ以内でお選びください。

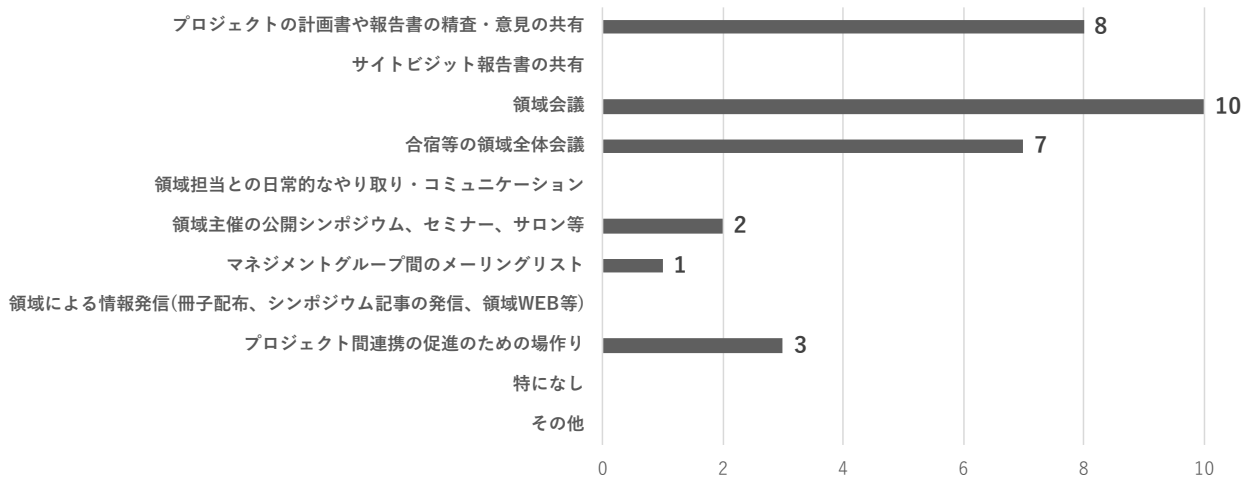


図 19 領域マネジメントグループ内での効果的なコミュニケーション手段

(3) 領域マネジメントグループ内コミュニケーションによる具体的影響

アンケートでは、領域マネジメントグループ内コミュニケーションによる具体的影響についても自由記述方式で尋ねている。

【AD 向け】

質問 4-3 マネジメント内コミュニケーションによる具体的影響

領域マネジメントグループ内でのコミュニケーションによって、どのような影響や効果があったのか(良い影響だけでなく、もし悪い影響もあれば)、できるだけ具体的にご記入ください。特になければ「特になし」とご記入ください。

具体的な影響には「領域会議等を通じて他の AD の考え方を知ることができる」「領域全体の方向性について確認する機会として機能している」等のポジティブな意見が見られた一方で、領域全体の進捗と個別テーマの課題を客観的に判断できる資料がないため、そういった機会がうまく活用できていない可能性がある」と指摘する意見もあった。

2.2.3.3. アドバイザーに求められる役割及び改善点

(1) アドバイザーが重視すべき視点

上記に関連して、AD が重視すべき視点について、AD にたずねた。最も多いのは「領域としての成果創出への寄与」で 9 件、次いで「募集に向けた検討課題の整理と企画に対する助言」の 7 件であった。

【AD 向け】

質問 7-1 アドバイザーが重視すべき視点

アドバイザーはどのようなことを重視して活動すべきだと思いますか。重視すべきと思うことを、次の中から 3 つ以内でお選びください。

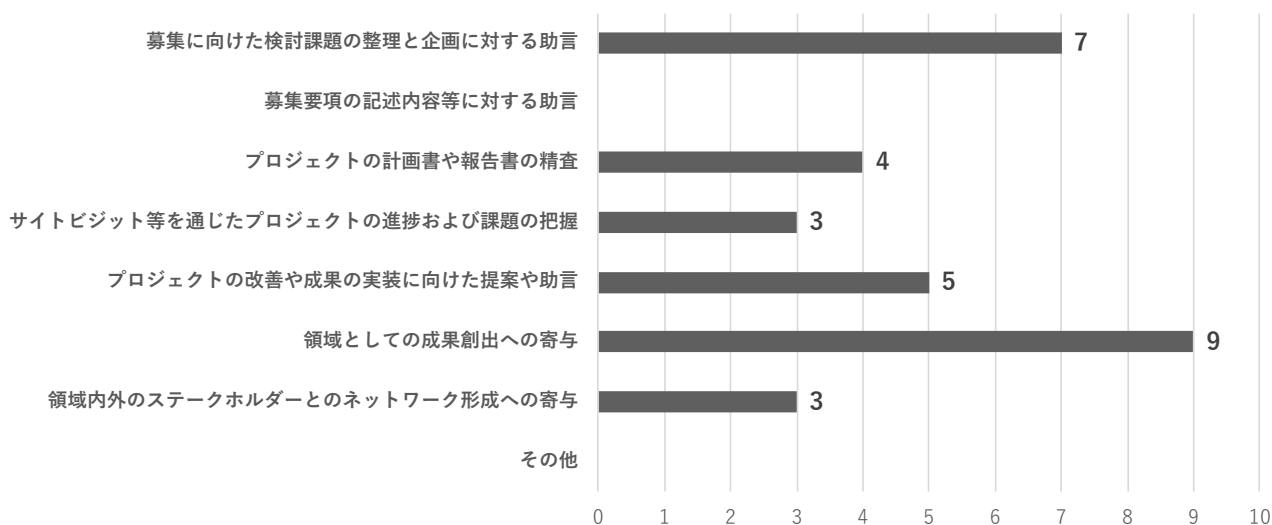


図 20 アドバイザーが重視すべき視点

(2) アドバイザー制度の改善点

AD が重視すべき視点と関連して、AD 制度の改善点について、具体的に尋ねた。

【AD 向け】

質問 7-2 アドバイザー制度の改善点

アドバイザー制度の改善点があれば自由にご記入ください。特になければ「特になし」とご記入ください。

「兼任での活動に限界があるため専任 AD 制度を検討してはどうか」、「各 PJ が領域全体の目標にどう貢献するのかを早めに見極めなければならないがその判断が難しい」こと、「担当 AD 相互のコミュニケーションの少なさ」などが挙げられていた。

2.3. 目標達成に向けた進捗状況等

本評価項目では、「①アウトプット・アウトカムの見込み」、「②領域成果に貢献しうるプロジェクトの推進」、「③領域目標に即したプロジェクト評価」、「④今後の課題の明確化」、「⑤改善の可能性」について検証することになる。

これに対し、本調査では、「全体としての成果創出の見込み」、「成果の担い手・受け手とのネットワーク形成の見込み」、「目標達成に向けた課題と対応」、「自身や周りの変化」、「RISTEX 固有の効果」という 5 つの観点から分析を行った。

2.3.1. 全体としての成果創出の見込み

AD に対し領域としての成果創出および目標達成の見込みがどの程度かを尋ねたところ、11 人全員が「期待できる」または「それなりに期待できる」と回答した。

【AD 向け】

質問 5-1 成果創出と目標達成の見込み

領域としての成果創出と目標達成の見込みはどの程度だと思いますか。領域の問題意識や目指す社会の姿、コンセプトの深化の状況などを踏まえ、該当するものを 1 つお選びください。

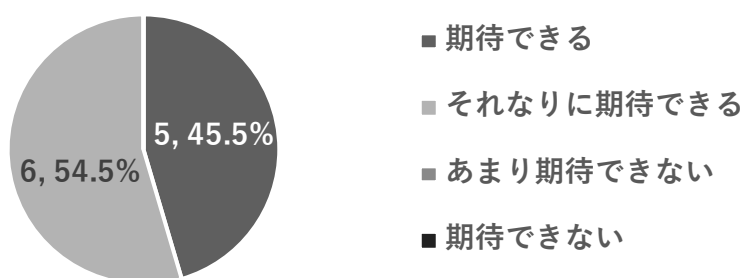


図 21 成果創出と目標達成の見込み

2.3.2. 成果の担い手・受け手とのネットワーク形成の見込み

2.3.2.1. 領域としての成果の担い手・受け手とのネットワーク形成の見込み

AD に対し、成果の担い手・受け手とのネットワーク形成の見込みについてたずねた。「形成されてきている」「それなりに形成されてきている」が 11 人中 8 人、「十分に形成されているとはいえない」が 3 人という結果になった。

【AD 向け】

質問 5-2 成果の担い手・受け手とのネットワーク形成の見込み

領域のコンセプトや成果を社会に普及・展開するために必要なネットワークは、形成されてきていると思いますか。該当するものを 1 つお選びください。

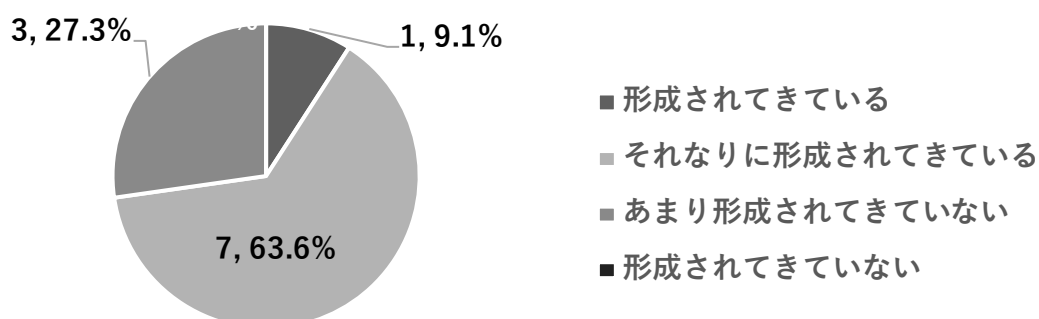


図 22 成果の担い手・受け手とのネットワーク形成の見込み

2.3.2.2. 成果の担い手・受け手（受益者）への働きかけ

(1) 成果の担い手・受け手への働きかけの有無

上記のようなネットワーク形成の見込みについて傍証するために、PJ 実施者に対し、想定される成果の担い手や受益者へ PJ から何かしらの働きかけやコミュニケーション等を行っているかをたずねた。

採択年度別に見ると（図 23）、平成 29 年度に採択された PJ 関係者による回答（21 件）と、平成 28 年度に採択された PJ 関係者による回答（28 件）とでは傾向の違いが見られる。具体的には、成果の担い手・受益者への働きかけを「十分行っている」「十分とは言えないが何かしら行っている」回答者が、H29 年度採択の PJ では合わせて 60%超、H28 年度採択の PJ では 80%超となっている。この違いは採択からの時間経過および研究活動の進展に伴い、成果の担い手・受益者が明確化してきていることを受けたものと考えられる。なお、質問 4-4 では、「行う予定はない」との回答者に対しその理由を尋ねているが、すでにターゲットとなる具体的な相手との継続的協力関係があることが理由として挙げられている。

これらを踏まえると、成果の担い手・受益者とのネットワーク形成に向けて、それなりの進展が期待できる状況であると言える。

【PJ 実施者向け】

質問 4-2 成果の担い手・受益者への働きかけ

想定される成果の担い手や受益者に対し、プロジェクトから何かしらの働きかけやコミュニケーション等を行っていますか。該当するものを1つお選びください。

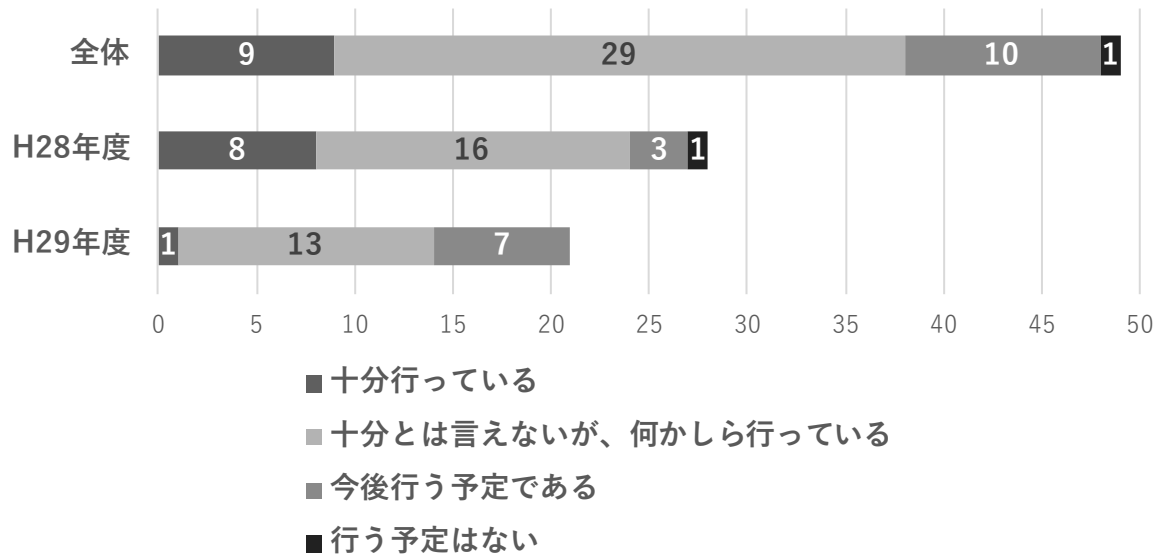


図 23 成果の担い手・受益者への働きかけ

(2) 成果の担い手・受益者への働きかけの内容

上記に関して、成果の担い手・受益者への働きかけについて、「十分行っている」「十分とは言えないが、何かしら行っている」「今後行う予定である」を選択した回答者に対し、その具体的な内容について尋ねた。

【PJ 実施者向け】

質問 4-3 成果の担い手・受益者への働きかけ内容

想定される成果の担い手や受益者に、どのような働きかけやコミュニケーションを行っていますか。あるいは行う予定ですか。その内容を具体的にご記入ください。

具体的な働きかけの内容は多岐にわたるが、学会等での研究活動や大学での教育活動など日常的な活動に加え、PJ ホームページや SNS、メーリングリスト、書籍などを通じた発信、PJ 独自もしくは政府など公的機関との共同によるアウトリーチイベント等の開催といった回答が比較的多くみられた。また、政府等の委員会への参加、企業研修等での活用、メディアからの取材といった相手からの要請を受けて行うものもいくつかあった。ユニークな取組としては、「自施設で成果物アプリケーションとしての意思決定支援を行う準備をしている」「いくつかのコミュニティの拠点（子育て関係、商店街など）でのワー

ワークショップの計画や、企業と連携した well-being 関係のワークショップの働きかけ」といったものもみられた。一方、何かしらの取組を行いたいのが具体的には未定、検討中とする回答もあった。

2.3.3. 目標達成に向けた課題と対応

2.3.3.1. 領域としての目標達成に向けた課題と対応

AD に対し、目標達成に向けた課題と対応について尋ねた。

【AD 向け】

質問 5-4 目標達成に向けた課題と対応

領域としての成果創出、目標達成、成果の担い手・受け手とのネットワーク形成に向けて、課題や改善提案があればお聞かせください。特になければ「特になし」とご記入ください。

課題としては、「対象を広げるためには、それなりの場作りと巻き込む仕組みが必要」、「領域として、具体的に社会に対して成果を出すため、調査研究成果をどのように統合し発信していくかについてさらに検討を深めていく必要がある」といった指摘があった。

こうした課題に対し、「どう改善すればいいかがよくわからないということが問題」であり、「前例がないことをやろうとしているので試行錯誤して進んでいくしかない」とする意見もある一方、「プロジェクトリーダーが工学系の研究者のように技術開発を推進する立場にある場合、人文社会系研究者との連携は、リーダーが選んだ研究者だけでなく、異なる意見をもつ研究者も関われる仕組みがあるとよい」「最終的な報告書の台割を考える段階で、個々の PJ の成果、届け先、ネットワークを把握して、事務局で、全体としてまとめてはどうか」といった具体的な提案もみられた。

2.3.3.2. 共進化プラットフォームへの意見

領域としての目標達成に向けた課題と対応に関し、PJ 実施者に対して、「共進化プラットフォーム」への意見を自由記述形式で求めたところ、30 人から具体的な回答があった。

【PJ 実施者向け】

質問 4-5 共進化プラットフォームへの意見

研究の成果と担い手や受益者をつなぐ共進化プラットフォーム構築に向けて、どのように領域運営を改善すればよいか、ご意見・ご要望を自由にご記入ください。特になければ「特になし」とご記入ください。

全体として、「共進化プラットフォーム」の機能や包摂する範囲等に対する回答者のイメージが多様であり、「名前の通りエコロジカルなプラットフォームができるとよい」、「コミュニケーションを促進するプラットフォームがあるのであれば活用したい」、「ある程度成果がまとまった段階で、その知見を必要としている様々な主体に届けるためのプラットフォームがあるとよい」といった期待の表明から、具体的な課題、懸念の指摘に至るまで様々な意見が寄せられた。

まず、プラットフォームでの活動に関して、「シンポジウムや合宿は活動内容の相互理解にはとても有用」といった現在の取り組みを活かす方向での意見がある一方、「(領域担当者と) PJ メンバー個人の対話」や「研究者同士が直接コミュニケーションできる」機会、仕組みが必要という提案、他の PJ との交流が成果の進展に結びつくため、「領域としてのイベントをもっと増やすとよい」という提案があった。さらに対象を広げ、「HITE 領域だけでなく、他領域との横断的交流や協同があっても良い」とする意見、「領域の研究者だけでなく、市民にも公開され、市民と触れ合うことのできる催しを開催」したり、「複数 PJ が共創的に、大学での講義などを通じて若年層にリーチしたり、行政を巻き込んだイベントを開催」といった提案もあった。

また、プラットフォームの構築にあたっては、「アウトリーチ活動のみでよいのかという不安が常にある」、「技術側の参加者に偏りが無いよう配慮が必要」、「企業との連携に一層注力していくべき」、「政策担当者や規制当局との研究会、意見交換会を領域側で働き掛けて実施してほしい」、「一般向け書籍を出版しやすい環境を作してほしい(例えば「人と情報のエコシステム選書」のようなシリーズなど)」といった意見もみられた。こうした取り組みを深めていくためには、既存の手法や取り組みについての理解が欠かせず、「特に、欧州では Horizon 2020 RRI で多くの知見が蓄積されており、主要人物を招いて講演会・シンポジウム・ワークショップを開催するのも良い」のではないかという意見や、本領域のテーマは日本国内のみにとどまらない問題を多く含んでいるため、「初期の段階から国際連携を強化し、プレゼンスをアピールしていくことも重要」と指摘する意見もあった。

こうしたプラットフォームが成立する前提として、「まず学際的な研究の方法論を構築することが重要」であり、「共通プロトコル」や「(俯瞰するための) 共進化プラットフォームの進捗地図」が必要とする意見もあった。これは「共進化プラットフォームの明確なイメージ図がない現状」を反映したものであるとも言え、「それぞれの PJ が目指すものを自由に追求させていただく今の形が一番良い」とする意見もみられた。

一方、共進化プラットフォームや RISTEX のアプローチに対するある種のとまどいのようなものも見受けられる。そもそも「学術研究を評価しないということが理解できない」という意見や「(PJ の成果は) 共進化プラットフォーム構築に向けて検討及び解決が必要な課題への汎用的な応用が可能なものであるが、他の PJ における成果と比較して、汎用性が広汎性または抽象的な研究と認識されているのではないか」という懸念、「研究者の多くは社会実装までを担う時間がない」、「問題意識を成果の担い手や受益者として想定される人びととどのように共有していくのか常に容易ならざる問題であり、具体案がなかなか思い浮かばない」という意見もあり、こうした状況に対し、「PJ 間連携の促進と共進化プラットフォームに向けた研究会活動など、研究成果の発信(広報)を行うメディアの担当者を決める必要がある」、「(PJ の採択段階で) コーディネーターとなる者を PJ が有しているかを確認することも重要」といったアイデアも提示されている。

こうした「(社会実装において重要な、マルチステークホルダーを説得し、一緒に協業していくという行為が) 苦手もしくは経験したことがない者が多い」といった研究者側の問題に加え、「領域マネジメントグループからのメッセージとしてキーワードが少しぼやけるところがあり、伝わりにくいと感じることがある」、「社会実装が必要なら、『社会実装』『マルチステークホルダー』などがキーワードになってくるが、RISTEX 側からこうしたメッセージがあまり伝わってこない」という問題も指摘されている。これらに対し、「こうしたキーワードや事例を多く示すことが次年度は必要」、「『インストラクショナル

デザイン』などをキーワードに加える」といった改善策が挙げられているが、一方、「そもそも領域運営側として、各PJにおける成果の担い手や受益者を把握していないこともあり、また、領域全体で本プログラムの担い手や受益者を検討していないとみられる。まるで通常の科研費と変わらず、単にPJ間の連携を促進するだけでは領域としての体をなしているとは言いがたい。(自身の関与する)PJ間では共進化していると自負しているが、領域運営側がそこに加わって何かを担おうという意識を感じない。あるいは領域運営側が自ら進化していこうとするという気概も見られない」とする厳しい意見もあった。

その他、共進化プラットフォームにおける取り組みに関し、「合宿の場所が少し遠い」、「個々のPJのイベントはともかく、領域全体イベントが東京開催に偏っているのは共進化プラットフォーム構築という目標にとって最終的に望ましくないのではないか」などといった懸念も表明されており、「物理的に参集しなくても機能する仕組みがあると良い」といった意見もみられた。

2.3.4. アドバイザー自身及び周りの変化

領域の活動に関わることで生じたAD自身及び周辺の変化については、「特に目立った変化はない」とする回答が2件あったが、その他のADについては何かしらの変化が生じている。回答の多いものとしては、「研究者とのネットワークが広がった」が6件、「自分が関心を持つ社会問題の見方が変わった」が5件であった。

【AD向け】

質問 6-1 自身や周りの変化

アドバイザーとして領域の活動に関わるようになったことで、ご自身や周りに何か変化がうまれましたか。該当するものをすべてお選びください。

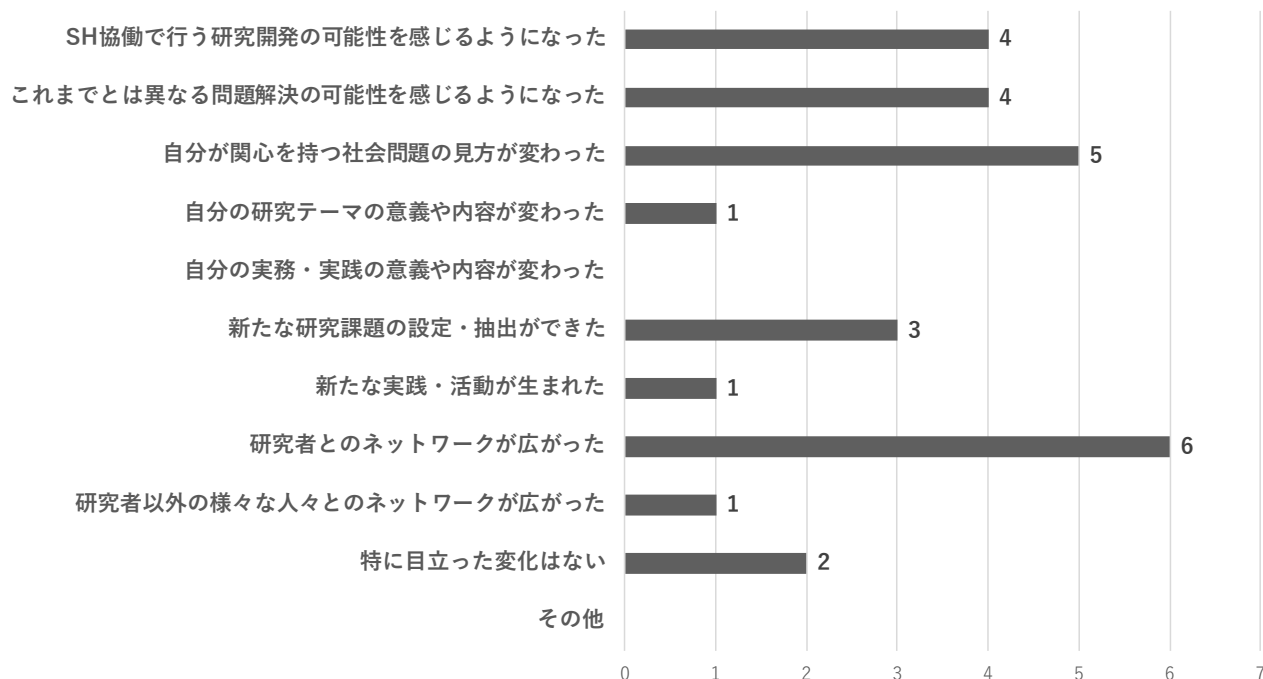


図 24 自身や周りの変化

2.3.5. RISTEX 固有の効果

アンケートでは、AD が認識している RISTEX 固有の効果についても尋ねている。

【AD 向け】

質問 6-2 RISTEX 固有の効果

他のプログラムや事業・制度では得られないような RISTEX の研究開発領域としての固有の効果、プロジェクト実施者をはじめ領域のステークホルダーにもたらしていると思いませんか。具体的な効果についてご記入ください。特になければ「特になし」とご記入ください。

「(現時点では) 特になし」とする回答が 2 件あり、また、それなりの効果を認めつつも「社会技術研究のなんたるかをもっと強く PJ 実施者および領域のステークホルダーおよび世間に理解してもらう必要がある」と一定の留保を示す AD もいたが、何かしらの固有の効果を持っている AD がほとんどであった。

具体的には、「真の意味での文・理工融合（原文ママ）」であり、「学際的なアプローチ（文理融合型）」で、かつ、フィールド（実証する現場）をもった PJ にかかわることは、理論・実証系の社会学者にとってチャレンジングであり、かつ、視野が広がるものであり、RISTEX でなくては得られない経験であることや、「アカデミックな研究だけでなく、PJ の後に何を残すかという観点」が重視されていること、「技術開発の上流段階から人文社会系研究者や利用者の視点を入れて、その相互作用を活発にするための共進化プラットフォームを構築するというアイデアは、独自性があるだけでなく、とりわけ技術者だけの閉じた開発になりがちな日本にとって意義のある試みである」こと、こうした試みを通じて、「領域ステークホルダーの間で共通の認識ができつつ」あり、自身の研究テーマを俯瞰的あるいは多面的に見られるようになるなど「研究者の意識を変えることに貢献している」こと、さらには領域を超えて「さきがけ等他の JST の PJ に情報が伝わり始めている」といった効果がすでにみられているのではないかと、との意見があった。また、「領域の目指しているものは、今の日本社会において必須ともいえるべき重要な課題への対応」であり、一方で、「目指すものが大きく広範であるがゆえに、効果の測定は容易ではなく、スタートして間もないため有意のある効果を認めることは難しい」としつつ、「先端技術に関係者がそれぞれの立場からかかわることで、その価値を共有できるようになるという研究手法そのものがまずは効果として認められる」のではないかと、とする意見もあった。

2.4. RISTEX への提案等

アンケートでは、1) AD に対して研究開発期間や予算に関する意見・改善提案を、2) AD 及び PJ 実施者の両者に対して RISTEX や領域への提案・要望を、それぞれ自由記述形式で尋ねた。本報告書の最後に、これらの意見についてとりまとめる。

2.4.1. 研究開発期間や予算

領域としての成果創出や目標達成に向け、領域や PJ の期間および予算の規模・使い方などは適切にかつ、AD に対し自由記述方式で回答を求めた。

【AD 向け】

質問 8 研究開発期間や予算

領域としての成果創出や目標達成に向けて、領域やプロジェクトの期間および予算の規模・使い方などについて、ご意見や改善提案があればご記入ください。特になければ「特になし」とご記入ください。

7人からよせられた回答をみると、領域が設定している課題は重要かつ困難なものであり、それに比して期間や予算が不十分であることが異口同音に指摘されている。そのため、期間延長や規模の拡大（領域を分割して拡大するなど）を図るべきとの意見が大勢を占めた。また、「国内外の動向把握とその領域内での共有など、常に何が領域として問題かを整理しておくために若干の予算を用いることも良いのではないか」という意見もあった。

2.4.2. RISTEX や領域への意見・要望

アンケートの最後では、AD 及び PJ 実施者の両者に対し、RISTEX への提案や要望について、自由記述形式で尋ねている。

【AD 向け】

質問 9 RISTEX や領域への意見・要望

今後の RISTEX や領域の運営改善に向けて、ご意見・ご要望があれば、自由にご記入ください。領域総括や領域担当へのご意見・ご要望でも構いません。特になければ「特になし」とご記入ください。

【PJ 実施者向け】

質問 5 RISTEX や領域への意見・要望

RISTEX や領域の運営改善に向けて、ご意見・ご要望があれば、自由にご記入ください。領域総括や領域担当へのご意見・ご要望でも結構です。特になければ「特になし」とご記入ください。

まず、AD については、ここでも期間延長を考慮すべきとの意見が見られた他、AD 間の意見交換機会を増やすことや、対外的な情報発信の強化（研究成果・効果だけでなく領域として設定している課題の共有も含めて）を求める意見があった。具体的には次のようなものである。

- さらに数年の期間延長も考慮してもよいように思う。
- RISTEX は社会技術研究の重要性を世間にもっと露出させる必要がある。
- 関係者間での情報共有だけでなく、研究の意図するところを広く社会発信してほしい。研究の効果
が十分ではない場合でも、こうした課題について共有することが社会にとっても有益ではないか。
- AD 間の意見交換をする機会を増やしたほうがよい。

PJ 実施者については、RISTEX 及び領域の方向性についての意見、領域合宿等の内容や運営に関する

改善提案、成果の評価方法や評価基準についての意見などが多く見られる。また、各 PJ の成功のためには社会技術、科学コミュニケーション、アセスメントに関する知見が必須であり、その種の専門家を領域全体の共通インフラとして捉え、各 PJ のアウトカムをより高めるための方策を考える場を設けたらどうか、という提案もあった。

中には厳しい意見もあるが、RISTEX 及び本領域の意義を理解しているからこそのものであり、採択年度及び PJ における立場別に整理した上で、以下に全文を記載する（「特になし」とするものや謝意のみの回答は除く）。なお、誤字等を含め表現は若干修正している部分がある。

表 4 RISTEX や領域への意見・要望（PJ 実施者、採択年度及び立場別）

平成 28 年度採択	意見
研究代表者 (3/5 件)	<ul style="list-style-type: none"> ● 自由にやらせていただいて感謝している。 ● RISTEX 側からも、我々が開発しようとしているものについて、具体的で生産的な要望をいただくと我々も焦点がより定まる気がする。 ● 研究成果の公表やそれに伴う報告による意見交換などを通じて、段階的に研究が進化することで目標達成が可能であると考えられる。すなわち、社会技術による具体的課題解決の方途を見いだすという目標を達成するためには、論文の公表や各種報告など社会的にも影響力を発揮することができる研究成果を数多く公表及び実施することが不可欠である。しかし、具体的な実績及びその労力についての評価が十分になされていない感がある。研究の過程における実績の評価なくして最終的な達成目標の成就に向けた評価が可能なのか。研究開発領域における達成目標とその過程における実績の関係が今後の評価において不透明であるように思われる。
グループリーダー (2/8 件)	<ul style="list-style-type: none"> ● 学術研究を評価しないということが理解できない。 ● 取り組んでいる課題や目的が大きすぎて、手に負えない感じがある。そこはあまり気にせず、このシステムの一つの歯車として、何か役に立てればと思っている。
その他 (6/15 件)	<ul style="list-style-type: none"> ● 科学技術イノベーション政策においては、ハードサイエンスだけでなく、社会に関する科学技術も重要。新センター長の下での RISTEX の活動に引き続き期待する。 ● 領域ディスカッションは非常に刺激的で、影響を受けている。 ● 異なる領域の成果をシンポジウムだけでなく常に発信・更新をすることでお互いに刺激が増えると思う。 ● 意思疎通の質の担保という意味で、合宿での成果発表などは大変意義のあるものであった。 ● 現時点では領域全体としての統合性にかけてという印象を持っている。残り期間の運営においては、統合に向けたマネジメントに力点をお願いしたい。 ● すでに世の中で起きている現象を十分認識したうえで議論を進めるべき。
平成 29 年度採択	意見
研究代表者 (3/6 件)	<ul style="list-style-type: none"> ● イノベーションにつながる先端的研究者を巻き込むことができれば、「正しいイノベーション」に導くことができるという意味で非常に期待している。 ● 成果物の活用のためには、RISTEX 内部だけでなく、CRDS などの JST 各部署、また各種行政担当者、国会図書館調査局、NISTEP など調査機関との連携が重要と考えられる。そのような政策形成に関わる部署・機関横断的な交流の実施があることで、HITE やその他 RISTEX による PJ 成果の波及が進むのではないかと思う。 ● 理工系が部分的にでも入る可能性を考慮すると研究予算と研究期間の増大が望まれる。
グループリーダー (4/8 件)	<ul style="list-style-type: none"> ● このような自然科学と文系学問の連携領域が整備されたことで、日本の研究者にも明るい未来が見えてきたような気がする。このようなプラクティスが今後も続くことを切に願っている。 ● RISTEX ワークショップは良いと思う。企業との一層の連携も留意していただきたい。ユニークなデータを収集している PJ が多く、そのデータを知りたい、または活用したいと考えており、実現に向けて取り組んでいただきたい。 ● プログラム(HITE)レベルで見れば、必要な要素(人材・ノウハウ)が揃っていると思うが、PJ 単位では、偏りもある。特に、社会技術、科学コミュニケーション、アセスメントに関する知見は PJ の成功には必須であり、その種の専門家を HITE 全体の共通インフラとして捉え、各 PJ のアウトカムをより高めるための方策を考える場を設けるのはどうか。合宿は全員が集まる貴重な場であるが、各 PJ でシリアルに発表してしまうと、時間のほとんどがそれにとられてしまう。PJ 発表はポスターにして、時間の多くを生産的取り組み(ワークショップなど)に利用するのはどうか。 ● RISTEX は本領域を、そして RISTEX 自体をどのようにしたいのかわからない。RISTEX の本懐は社会実装を目指すところにあると考えるが、本領域は JST 本体との連携や本体へのアピールを目指して科

	<p>学者側に気兼ねしているのか、社会の側を十分に見ていない印象がある。結果的に RISTEX が JST から社会からも不要な存在として見なされてしまうのではないかと強い危惧がある。領域総括や領域担当が文部科学省に対して RISTEX の社会的意義と成果を強く訴えていかなければ、これまでの先達の努力と功績、そして培った知識そのものが忘れられていくだけである。</p>
<p>その他 (2/7 件)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 合宿の目的、意味については再考いただきたい。分野の異なる研究者が多数出席していることもあり、そもそもの目的、そのための手段を明確に設定しないと、形式的な挨拶や雑談だけで多くの研究者の時間が消費されてしまう。 ● 次のステップのサポート

付録：評価項目と調査項目との対応表（詳細）

評価項目(中間評価)	調査項目	
	アドバイザー向けアンケート調査	プロジェクト実施者向けアンケート調査
1. 対象とする問題及びその解決に至る筋道(ストーリー)		
1-1. 対象とする問題と目指す社会の姿 ・対象とする問題の状況や要因が具体的に分析されているか。 ・問題状況の全体像の中で、領域の政策的・社会的位置づけ(国や自治体の政策・施策や、民間を含めた類似の取り組みとの関連性、違い等)が明確にされているか。 ・問題の状況分析に基づき、意図する社会変化が具体的に提示されているか。 ・領域の実施期間中に問題状況の変化があった場合、それを踏まえた分析や目指す社会の姿の再検討がなされているか。	質問 1-1 外部環境の変化有無と対応状況 領域がはじまった3年前(平成 28 年度)と比較し、領域をとりまく問題状況や社会情勢は変化していると思いますか。また、変化に対し、領域として適切に対応できていると思いますか。該当するものを1つお選びください。 ①変化はあったが、適切に対応できている ②変化はあったが、十分に対応できていない ③対応が必要なほど大きな変化はなかった 質問 1-2 外部環境の変化と対応の内容 領域をとりまく問題状況や社会情勢にどのような変化があるのか具体的にご記入ください。また、適切に対応できているもしくは十分に対応できていないと考える理由についても合わせてご記入ください。特になければ「特になし」とご記入ください。	質問 2-1 外部環境の変化有無 プロジェクトがはじまった当初と比較し、領域をとりまく問題状況や社会情勢は変化していると思いますか。該当するものを1つお選びください。 ①大きな変化があった ②大きな変化はなかった ③判断できない 質問 2-2 外部環境の変化の内容 領域をとりまく問題状況や社会情勢にどのような変化があったのか、具体的にご記入ください。
1-2. 問題解決に向けての具体的な目標と達成方法 ・領域終了時点(あるいは終了から2、3年以内の短期間)に実現したい具体的で妥当な目標が設定されているか。 ・目標達成に向けて妥当な方法がとられているか。 ・RISTEX の運営方針と整合しているか。		
1-3. 成果の社会への影響 ・領域成果が中・長期的に社会へ影響を及ぼし目指す社会に至るまでの構想は妥当か。 ・適切な成果の担い手・受け手が想定されているか。 ・中・長期的に社会へ影響を及ぼすための方策が検討されているか。	質問 5-3 アプローチすべき対象 今後、成果の担い手・受け手として領域がアプローチすべき対象にはどのような人や組織がいますか。特に領域として対話や連携などを模索すべき方々がいたら、その理由や方法とともに具体的にご記入ください。特になければ「特になし」とご記入ください。	質問 4-1 成果の担い手・受益者 プロジェクトの成果の普及・展開に向けて、働きかけや情報発信を行うべき成果の担い手(成果を普及展開する人・組織)や、受益者(政府・自治体、各種団体等の利害関係者、市民等)として、どのような人々を想定していますか。具体的にご記入ください。特になければ「特になし」とご記入ください。

<p>2. 領域の運営・活動状況(プロセス)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目標達成に向けて妥当な活動計画が立てられているか。 ・活動中に課題点や困難を把握できているか。それらを乗り越える方策が検討されているか。 ・妥当なプロジェクト・ポートフォリオが考えられ、募集選考やプロジェクト・マネジメントに反映されているか。 ・領域内外のステークホルダーを巻き込む取り組みや働きかけが適切になされているか(アドバイザー、各プロジェクト、領域成果の担い手・受け手)。 ・プロジェクト実施者をはじめ、ステークホルダーからの情報を基に、領域運営や活動状況について妥当な分析がなされているか。 	<p>質問 2-1 潜在的な提案者へのアプローチの十分性 領域の成果創出に貢献しうる潜在的な提案者に対し、領域として十分にアプローチできていると思いますか。該当するものを1つお選びください。</p> <ol style="list-style-type: none"> ①アプローチできている ②それなりにアプローチできている ③あまりアプローチできていない ④アプローチできていない <p>質問 2-2 潜在的な提案者にアプローチするための効果的な取組 領域の成果創出に貢献しうる潜在的な提案者にアプローチするために、効果的であると思う領域の取組を次の中から3つ以内でお選びください。</p> <ol style="list-style-type: none"> ①領域主催のシンポジウム ②潜在的な提案者への個別アプローチ ③募集説明会の実施(会場での個別相談含む) ④募集要項の配布 ⑤JST(RISTEX・領域含む)のWEB やメーリングリスト、SNS 等での提案募集の周知 ⑥JST 外(関連しそうな学会や NPO 等)のWEB やメーリングリスト、SNS 等での提案募集の周知 ⑦総括・アドバイザーのネットワークを通じた提案募集の周知 ⑧領域冊子の配布 ⑨特になし ⑩その他() <p>質問 2-3 募集・選考過程における提案を育む取組の十分性 募集・選考過程や採択決定直後の段階において、領域として、提案を「育む」取組は十分にできていると思いますか。該当するものを1つお選びください。</p> <p>提案を「育む」とは、提案された内容と領域の問題意識およびコンセプトとの親和性の向上や方向性の調整、社会問題の解決に向けた協働や社会実装を重視した研究開発計画の具体化、改善等に取組むことです。</p> <ol style="list-style-type: none"> ①できている ②それなりにできている ③あまりできていない ④できていない <p>質問 2-4 提案を育む効果的な取組 募集・選考過程や採択決定直後の段階において、提案を「育む」取組として、効果的であると思うものを、次の中から3つ以内で選んでください。</p> <ol style="list-style-type: none"> ①領域主催のシンポジウム ②領域主催のワークショップ 	<p>質問 3-1 提案・計画の作成や改善等に対する領域活動の影響の有無 募集・選考段階および採択決定直後において、提案を着想し、計画を作成し、内容を改善していくにあたり、領域側の活動等から何らかの影響を受けましたか。該当するものを1つお選びください。</p> <ol style="list-style-type: none"> ①影響を受けた ②それなりに影響を受けた ③あまり影響を受けなかった ④影響を受けなかった <p>質問 3-2 提案・計画の作成や改善等に影響を与えた領域活動の内容 募集・選考段階および採択決定直後において、影響の大きかった領域側の活動を次の中から3つ以内で選んでください。</p> <ol style="list-style-type: none"> ①領域主催のシンポジウム ②領域主催のワークショップ
--	---	---

	<p>③募集説明会(会場での個別相談含む) ④書類選考およびその後のコメントバック ⑤面接選考会でのやり取り ⑥総括面談での採択条件の刷り合わせや方針の確認 ⑦プロジェクト企画調査の実施 ⑧初年度採択のラインナップ ⑨WEB サイト開設や冊子の発行等広報ツールの拡充 ⑩募集要項の改定 ⑪潜在的提案者への個別アプローチ ⑫初年度応募された方々へのフィードバック ⑬企画調査などによるマッチングや計画の練り直し ⑭特になし ⑮その他()</p> <p>質問 2-5 募集・選考段階での領域活動の具体的影響 募集・選考段階や採択決定直後における領域活動によって、どのような影響や効果があったのか(良い影響だけでなく、もし悪い影響もあれば)、できるだけ具体的に記入してください。特になければ「特になし」とご記入ください。</p> <p>質問 3-1 採択後のプロジェクトとのコミュニケーションの十分性 (担当プロジェクトを中心にお答えください) RISTEX では、領域の成果創出と目標達成に向けて、採択後もプロジェクトに対して関与するハンズオンマネジメントを実施していますが、プロジェクトとのコミュニケーションは十分にとれていますか。該当するものを1つお選びください。</p> <p>①コミュニケーションがとれている ②それなりにコミュニケーションがとれている ③あまりコミュニケーションがとれていない ④コミュニケーションがとれていない</p> <p>質問 3-2 採択後のプロジェクトとの効果的なコミュニケーション手段 (担当プロジェクトを中心にお答えください) プロジェクトの実施段階において、プロジェクトを育むために効果的と思うコミュニケーション手段や取組を3つ以内でお選びください。 プロジェクトを「育む」とは、プロジェクトと領域の問題意識およびコンセプトとの親和性の向上や方向性の調整、社会問題の解決に向けた協働や社会実装を重視した研究開発計画の具体化、改善等に取り組むことです。</p> <p>①プロジェクトの計画書や報告書のやり取り ②プロジェクトごとの進捗報告会、意見交換会 ③サイトビジット</p>	<p>③募集説明会(会場での個別相談含む) ④書類選考及びその後のコメントバック ⑤面接選考会でのやり取り ⑥総括面談での採択条件の刷り合わせや方針の確認 ⑦プロジェクト企画調査の実施 ⑧領域メーリングリストを利用した情報交換 ⑨領域による情報発信(冊子配布、シンポジウム記事の発信、領域 WEB 等) ⑩プロジェクト間連携の促進のための場作り ⑪その他() ⑫分からない</p> <p>質問 3-5 プロジェクトに対する領域活動の具体的影響 募集・選考段階や採択決定直後もしくはプロジェクト実施過程における領域活動によって、プロジェクトの何がどう変わったのか(良い影響だけでなく、もし悪い影響もあれば)、できるだけ具体的に記入してください。特になければ「特になし」とご記入ください。</p> <p>質問 3-3 プロジェクト実施に対する領域活動の影響の有無 これまでプロジェクトを実施していく過程で、領域側の活動等から何らかの影響を受けましたか。該当するものを1つお選びください。</p> <p>①影響を受けた ②それなりに影響を受けた ③あまり影響を受けなかった ④影響を受けなかった</p> <p>質問 3-4 プロジェクト実施に影響を与えた領域活動の内容 これまでプロジェクトを実施していく過程で、影響の大きかった領域側の活動を次の中から3つ以内で選んでください。</p> <p>①プロジェクトの計画書や報告書のやり取り ②プロジェクトごとの進捗報告会や意見交換会 ③サイトビジット ④合宿等の領域全体会議 ⑤領域主催シンポジウム ⑥担当アドバイザーとのやり取り、コミュニケーション ⑦領域担当との日常的なやり取り、コミュニケーション</p>
--	--	--

	<p>④合宿等の領域全体会議 ⑤領域主催の公開シンポジウム、セミナー、サロン等 ⑥担当アドバイザー制 ⑦領域担当との日常的なやり取り・コミュニケーション ⑧領域メーリングリストを利用した情報交換 ⑨領域による情報発信(冊子配布、シンポジウム記事の発信、領域 WEB 等) ⑩プロジェクト間連携の促進のための場作り ⑪特になし ⑫その他()</p> <p>質問 3-3 ハンズオンマネジメント等による具体的影響 プロジェクトの実施段階における領域活動(プロジェクトとのコミュニケーションおよびハンズオンマネジメント)によって、どのような影響や効果があったのか(良い影響だけでなく、もし悪い影響もあれば)、できるだけ具体的に記入ください。特になければ「特になし」とご記入ください。</p> <p>質問 4-1 マネジメント内のコミュニケーションの十分性 よりよい領域の成果創出と目標達成に向けて、領域マネジメントグループ(総括・アドバイザー・RISTEX)内でのコミュニケーションは十分にとれていますか。該当するものを1つお選びください。</p> <p>①コミュニケーションがとれている ②それなりにコミュニケーションがとれている ③あまりコミュニケーションがとれていない ④コミュニケーションがとれていない</p> <p>質問 4-2 マネジメント内での効果的なコミュニケーション手段 領域の成果創出と目標達成に向けて効果的と思う領域マネジメントグループ内でのコミュニケーション手段や取組を3つ以内でお選びください。</p> <p>①プロジェクトの計画書や報告書の精査・意見の共有 ②サイトビジット報告書の共有 ③領域会議 ④合宿等の領域全体会議 ⑤領域主催の公開シンポジウム、セミナー、サロン等 ⑥領域担当との日常的なやり取り・コミュニケーション ⑦マネジメントグループ間のメーリングリスト ⑧領域による情報発信(冊子配布、シンポジウム記事の発信、領域 WEB 等) ⑨プロジェクト間連携の促進のための場作り ⑩特になし ⑪その他()</p>	<p>⑧プロジェクト間連携の促進のための場作り ⑨領域紹介冊子の製作のための取材・鼎談の実施 ⑩領域メーリングリストを利用した情報交換 ⑪領域による情報発信(冊子配布、シンポジウム記事の発信、領域 WEB 等) ⑫その他()</p> <p>質問 3-5 プロジェクトに対する領域活動の具体的影響(再掲) 募集・選考段階や採択決定直後もしくはプロジェクト実施過程における領域活動によって、プロジェクトの何がどう変わったのか(良い影響だけでなく、もし悪い影響もあれば)、できるだけ具体的に記入ください。特になければ「特になし」とご記入ください。</p>
--	--	---

	<p>質問 4-3 マネジメント内コミュニケーションによる具体的影響 領域マネジメントグループ内でのコミュニケーションによって、どのような影響や効果があったのか(良い影響だけでなく、もし悪い影響もあれば)、できるだけ具体的にご記入ください。 特になければ「特になし」とご記入ください。</p> <p>質問 7-1 アドバイザーが重視すべき視点 アドバイザーはどのようなことを重視して活動すべきだと思いますか。重視すべきと思うことを、次の中から3つ以内でお選びください。</p> <ol style="list-style-type: none"> ①募集に向けた検討課題の整理と企画に対する助言 ②募集要項の記述内容等に対する助言 ③プロジェクトの計画書や報告書の精査 ④サイトビジット等を通じたプロジェクトの進捗および課題の把握 ⑤プロジェクトの改善や成果の実装に向けた提案や助言 ⑥領域としての成果創出への寄与 ⑦領域内外のステークホルダーとのネットワーク形成への寄与 ⑧その他() <p>質問 7-2 アドバイザー制度の改善点 アドバイザー制度の改善点があれば自由にご記入ください。 特になければ「特になし」とご記入ください。</p>	
<p>3. 目標達成に向けた進捗状況等(アウトカム)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・領域のアウトプット及びアウトカムの創出状況、見込みはどうか。それらについて、妥当な分析がなされているか。 ・領域のアウトカム創出に貢献しうるプロジェクトが推進されているか。 ・領域目標に即して適切なプロジェクト評価がなされているか。 ・今後取り組むべき課題が具体的に提示されているか。 ・目標達成に向けて、どのような改善が可能か。改善提案に至った理由は何か。 	<p>質問 5-1 成果創出と目標達成の見込み 領域としての成果創出と目標達成の見込みはどの程度だと思いますか。領域の問題意識や目指す社会の姿、コンセプトの深化の状況などを踏まえ、該当するものを1つお選びください。</p> <ol style="list-style-type: none"> ①期待できる ②それなりに期待できる ③あまり期待できない ④期待できない <p>質問 5-2 成果の担い手・受け手とのネットワーク形成の見込み 領域のコンセプトや成果を社会に普及・展開するために必要なネットワークは、形成されてきていると思いますか。該当するものを1つお選びください。</p> <ol style="list-style-type: none"> ①形成されてきている ②それなりに形成されてきている ③あまり形成されてきていない ④形成されてきていない 	<p>質問 4-2 成果の担い手・受益者への働きかけの程度 想定される成果の担い手や受益者に対し、プロジェクトから何かしらの働きかけやコミュニケーション等を行っていますか。該当するものを1つお選びください。</p> <ol style="list-style-type: none"> ①十分行っている ②十分とは言えないが、何かしら行っている ③今後行う予定である ④行う予定はない <p>質問 4-3 成果の担い手・受益者への働きかけ内容 想定される成果の担い手や受益者に、どのような働きかけやコミュニケーションを行っていますか。あるいは行う予定ですか。その内容を具体的に</p>

	<p>質問 5-4 目標達成に向けた課題と対応 領域としての成果創出、目標達成、成果の担い手・受け手とのネットワーク形成に向けて、課題や改善提案があればお聞かせください。特になければ「特になし」とご記入ください。</p> <p>質問 6-1 自身や周りの変化 アドバイザーとして領域の活動に関わるようになったことで、ご自身や周りに何か変化がうまれましたか。該当するものをすべてお選びください。</p> <p>①ステークホルダー協働で行う研究開発の可能性を感じるようになった ②これまでとは異なる問題解決の可能性を感じるようになった ③自分が関心を持つ社会問題の見方が変わった ④自分の研究テーマの意義や内容が変わった ⑤自分の実務・実践の意義や内容が変わった ⑥新たな研究課題の設定・抽出ができた ⑦新たな実践・活動が生まれた ⑧研究者とのネットワークが広がった ⑨研究者以外の様々な人々とのネットワークが広がった ⑩特に目立った変化はない ⑪その他()</p> <p>質問 6-2 RISTEX 固有の効果 他のプログラムや事業・制度では得られないような RISTEX の研究開発領域としての固有の効果を、プロジェクト実施者をはじめ領域のステークホルダーにもたらしていると思いますか。具体的な効果についてご記入ください。特になければ「特になし」とご記入ください。</p>	<p>にご記入ください。</p> <p>質問 4-4 成果の担い手・受益者への働きかけを行っていない理由 想定される成果の担い手や受益者に働きかけを行っていない、行いにくいことがありましたら、その理由や状況等を具体的にご記入ください。</p> <p>質問 4-5 共進化プラットフォームへの意見 研究の成果と担い手や受益者をつなぐ共進化プラットフォーム構築に向けて、どのように領域運営を改善すればよいか、ご意見・ご要望を自由にご記入ください。特になければ「特になし」とご記入ください。</p>
<p>4. RISTEX への提案等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・領域設計や設定当初の運営について改善すべき点は何か。 ・RISTEX として新たに取り組むべき課題は何か。 ・領域・プログラムを推進する上で期待されるセンターの機能等は何か。 	<p>質問 8 研究開発期間や予算 領域としての成果創出や目標達成に向けて、領域やプロジェクトの期間および予算の規模・使い方などについて、ご意見や改善提案があればご記入ください。特になければ「特になし」とご記入ください。</p> <p>質問 9 RISTEX や領域への意見・要望 今後の RISTEX や領域の運営改善に向けて、ご意見・ご要望があれば、自由にご記入ください。領域総括や領域担当へのご意見・ご要望でも構いません。特になければ「特になし」とご記入ください。</p>	<p>質問 5 RIXTEX や領域への意見・要望 RISTEX や領域の運営改善に向けて、ご意見・ご要望があれば、自由にご記入ください。領域総括や領域担当へのご意見・ご要望でも結構です。特になければ「特になし」とご記入ください。</p>

